運轉手になんか……でも、もしかさうだと私は恥かしい、阿母さんにいつた言葉もある、私は傲慢な女だと人にいはれるが本當にさうだから、決して運轉手などには惚れません、とかういつたのに……』と考へて來た、考へれば考へる程足はだん〳〵遲くなつてくる、かと思ふと、また氣が付いたやうにせか〳〵と歩み出す、今は危險も忘れ果てたやうに、たゞそれからそれへと考へつゞけた

『無敎育者！』と滿璃子ははぢかれたやうに獨語つた、『けれど得能は無敎育者だらうか、いゝえ、さうぢやない、決して得能は無敎育者ではない、それが證據には彼の一言一行でわかる、もし無敎育者

ならばどうしてあゝいふ叮嚀な禮儀を知らう、婦人に對して快感を與へるあの樣子、それから身のこなしといひ、身體の樣子といひ、どうしてもあれは由ある生れに相違ない、由ある生れの者が零落したとか何とか其處には悲しい話もあるに相違ない』

と滿璃子は頻に心の中で辯護した、持つて生まれた氣質として、滿璃子はかう辯護しなければ承知が出來ないのだ、そして又考へた

『よし又無敎育なら無敎育でもいゝ、私は今そんな事を問ふのぢやない、それよりも彼は私を援けんが爲に生命をも犧牲にした男だ、それに對してだけでも酬いる所がなければならない……』

かう考へながら、疲れ果てた足をあてもなく運んだ

やがて滿璃子はある村へ出た、そこは爭鬪の場所よりは餘程離れてゐた、滿璃子は漸く安心して、ある料理屋に入り車を命じた、けれども折惡しく無かつたので再び疲れた足をやつと運んだが、宿屋へついたかと思ふと、今度は喪心して倒れて了つた

惡漢の行方

此事件の間の事である、既に語つた通りに、博士はいくら待ても滿璃子が見えないので、犯罪の場所まで馬車を駈つたのだ、そして

慘憺たる光景に打ち驚き、先づ負傷せる得能を馬車に援け乘せ隣村まで送り届けて醫者に託し、それから武智の處へ電報をうつたのである、先に滿璃子の爲に簪で頭を衝かれ、自働車より落ちた惡漢の一人は、此時既に息を吹き返して、忽ちその場を遁げ去つた、それが爲に博士は此者の姿を見なかつたのである

此惡漢はそれから林に遁げ込だ、そして彼方此方と彷徨つてゐると、ふと一人の友達に出會つた、これ即ち滿璃子に砂をあびせられた男である

『やア、兄弟どうした？』と歩み寄りながら聲をかけた

前の男は古い建物の側の石に腰をかけてゐたか、まだ眼が痛むと見えて

『な、な、何だ、誰だ？』

と怪しげな眼を睜つた

『俺だよ、どぢるない、一體どうしたんだ？』

『やア貴公か、俺はひでえ眼に會つたぞ、馬鹿氣て話にもならねえ』

『どうした、え、どうした』

『どうしたも斯うしたもあるもんか、どうも阿魔の爲にひどい目にあつた、これ此通り』

と眼をひつぱつて見せる

『何だ眼つぶしか、はゝゝゝ、だけど阿魔たア誰だ？』

と不審さうな顏をして訊ねた

『極つてるぢやねえか、そらあれよ』

『うゝむ、さうか』と呻くやうな聲を出して『どうもあれにやひどい眼に會つたぞ、俺ばかりと思つたら貴公もさうか』

『おい、それぢや貴樣もどうかされたのか』と甲の男は喫驚して訊ねた

『さうだ、彼奴の自働車に飛び乘つた處が、いやといふ程頭を衝か

れて、お話にならねえ失敗をした』

『ふむ、ぢや貴公は初めの中だな』

『然うとも、貴公はまたどうして非道え目に會つたんだ』

『俺か、まあ歩きながら話さうよ』

いひながら彼は立上つた、漸く砂だけはとれたと見えて、赤くした眼を擦りながら、二人して其處から遁げ出した

『おい、手が廻らん中に少し此邊を離れやうよ』

『うむ、話はまあそれからだ』

いふかと思ふと、彼等は忽ち姿を隱して了つた

再會の歡喜

喪心して昏倒した滿璃子は、宿屋の者の親切な介抱に漸く息を吹返した、それから藥を飲まされたり、力になる食物を勸められたりしてから、靜かに變事の顚末を物語つた、そして宿の者の驚くのを後にして、再び馬車を雇つて事件の場所へ引返した、村の者の誰彼も一緒に出かけた、此變事はもう途中の村々に擴がつてゐた、行き逢ふ人々は聲高に罵り叫ぶ

『お前らも見に行くだかね、もうはあ誰もゐねえだよ』

と一人の百姓が叫んだ、そして滿璃子は精しく樣子を聞くと、運轉手はもう援けられて、隣村の醫者の處へ來てゐるとの事である

そこで滿璃子は大に喜び、早速馬に鞭を加へて隣村へと急いだ、然しまだ馬車の馳るのがもどかしい、車も惡いし馬もよくない田舍馬車の事であるから、具合の惡いのは當然の事であるが、滿璃子は焦りに焦つて益々〳〵鞭を掉つた

やがて馬車は眼ざす處へついた、滿璃子は醫員に來意を告げて、胸をわく〳〵させながら得能の病室を訪づれた、得能は半眼を見開いて蒼い顏をしてベッドに蹲つてゐたが、滿璃子を見ると急に雙頰

に紅を潮した、そしてつとめて半ば起き上りながら

『お、滿璃子さん、貴女は大丈夫だつたのでしたか、あれから何も起らなかつたのですか』

とせき込んで訊いた、滿璃子は眼を閉ぢてじつと感慨に沈んでゐたが靜に眼を開き、優しい聲でいつた

『貴方のおかげで援かりました、それより前に度々御注意を下すつたのに、强情にも前へ進んだので、既での事貴女の生命を失くさうと致しました』

その調子はまるで僕に對する態度ではない、得能は感激して聲を

ふるはせながら

『いゝえ、貴女の爲に何で生命が惜う御座いませう、私はたゞもう貴女さへ危險から免れゝばと思つて、その爲にはもう何物をも犧牲にするつもりで居りました、然るに私は見苦しくもあんな態になる貴女はどうなされた事かと、それぱかりを心配して居りました』

『本當にもう、お禮の申しやうもありません』と滿璃子は心から感謝した

『いゝえ、私はもう初めから貴女をどうか保護したいといふ一つの願から……』

とあとをいひ淀む、と滿璃子は急に眼を輝かして

『え？たつた一つの願から……、私の運轉手になつたのですか』

『全くさうで御座います』と得能はおとなしくいひ切つた

『では私が雇はなかつた時はどうしました？』

と滿璃子は微笑みながら訊いた

『その時は……、どうにかして是非近い處にゐる樣な方法を講じましたらう』

といひ切つた、聲は低かつたが何處となしに力を帶びてゐて、その眼は何となく輝いてゐる、それを聞くと、滿璃子は顏のほてるのを

覺えた、而して口の中で

『御禮の申上げ樣も……』と呟いた

『私が何の役に立ちませう』と得能は胸ををどらせつゝいひ續ける

『私がかう決心したのも皆な貴女の罪です……、いゝえ、美くしい貴女に何の罪がありませう、たゞ貴女といふものにお目にかゝつたのが私の不幸です、いつもいつも、馬で公園にお出での姿を見るとたゞもう何ともいへない氣がいたしまして、その度におあとをつけたので御座います、そして出來るだけ近づく方法を講じて、萬一の時に御用にも立たうと思つたのです』

得能はかう語り來つてほつと一息吐いた、風は微かに窓の玻璃戸に囁いてゐる

病床の秘密

互に無事な顏を見合せた、その再會の歡喜もあつたらうが、得能の思ひ切つた言葉には、流石に滿璃子も胸を轟かせずにはゐられなかつたので、得能の言葉の終るや否や

『一寸……』と言葉を挿れた『お話し中に他の事をいふ樣ですけど間違つたら御免なさい、貴女はどうも普通の人では無いやうに思は

れます、御様子といひ言葉遣といひ、どうしても今の職業と似合ひませんもの、私は初めからさう思つてゐました……、』

と終の方は微かに口の中でいふ、得能は一寸眼を閉ぢて、何か考へるやうな風をしてゐたが、直ぐまたはつきり眼を見開いて

『然うです、仰有る通りに實は平民では無いのです、かういふ事を申すのは自分でも何だか不快ですが、今夜は皆な申上げて置きませう、……實は私も華冑の末班に連つて居るのです、けれども一寸放蕩をしたといふので、今は兩親に見離されて居ります、その爲に本名も明せません様なわけで……』

『え……？　では得能つてのは貴方の本當の姓ぢやないの？』

と滿璃子は驚ろいて口を挿れた

『はあ、さういふ様なわけですから、たつた一つのお願は、是非今まで通りに運轉手をさせといて頂きたいのです』

といつて、下より滿璃子の顔を凝と見上げた、その顔は蒼褪めて、頬は死人の様に痩せて見える、滿璃子は顔を負傷者に近寄せて

『まあ然うですか、然しかういふ秘密を打明けて下すつたといふ事は私、非常に感謝いたします、決して私は秘密を他へもらす様な事は致しませんが、貴方も亦當分此秘密を私だけにして御置き下さい』

此時コト〳〵と扉をノックする者がある、滿璃子はふと話をやめて椅子を少し寢臺から離すと間もなく、醫者、助手、看護婦などの數人が入つて來た、そうして輕く滿璃子に會釋して、靜かに患者の方へ歩み寄つた

『どうです氣分は？』

といひながら、醫者は物馴れた手つきで先づ得能の脈をとつた、その間に看護婦は驗溫器を挿して、それから病狀日記を取つて醫者の言葉を待つてゐる

『さうですねえ、患部の周圍が少し痛む位で、氣分は大分い〳〵です』

『は〳〵あ、脈搏ももう常調に復しかけた樣だ』

といひながら、更に胸をひろげて聽音器を當て、舌を出させてその色を驗し、叮嚀に一通りの診察を終つて、一々それを看護婦に記入させた、それから得能に向つて

『いやもう大丈夫ですよ、打僕傷だから餘病さへ併發しなければ恐る〳〵事は無いが、それも〳〵心配ありません、此分ならば靜に歩いても差支ないでせう』

滿璃子は嬉し相に進み出で〳〵

『では馬車に乘せても大丈夫でせうか』

『え、それはもう決して御心配ありませんな』

『では馬が……』と、滿璃子はせき込んで

『馬車が何處かに有りませうか、自働車ならなほいゝんですが』

『私の家に馬車なら一臺ありますが、それをお貸し申しませう』

『さうですねえ、では、どうぞお願致します』

やがて仕度して引出された、此家の馬車に滿璃子は得能を援け乘せてペテログラードの自分の家を指して出發した

武智と和田博士とは、それから三十分ばかりの後に此家へ着いた

伏見伯と小間使

滿璃子等の馬車は數時間の後無事にペテログラードの池邊邸へ着いた、その晝よりの出來事に、驚き悲しめる池邊邸の人々は、たゞ爲す所もなく騷いでゐたが、思はぬ時の思はぬ歸來に、下女下男の末に至るまで狂喜して二人を迎へた

滿璃子は先づ馬車より下りて一同に命令した

『一寸皆な靜かになさい、それから得能さんは母屋へお連れ申せ、此人は今日私の危ない命を救つて下すつた、これからは母屋へお住

ませするのだから、お客様と思つて叮嚀におあしらひ申すやう』

老母は此時家に居なかつた、といふのは數日前から田舍の領地へ行つてるからである、それが爲に滿璃子が一人家に居たのだ、併しかうした事件の起つた上は、令孃に對するいろんな風説が社會上にもまた一家内にも起らざるを得ない

市の者は專ら滿璃子と運轉手との間を疑つた、そして二人で密會の爲に郊外へ行つたとか、二人は前から關係してゐたとか、それを惡漢が付け覗つてゐたのだとか、いろ〳〵な噂が廣まつた、召使の女中などにも、平生滿璃子の活潑にして男の様な態度に感心してゐ

ない者などは、何かと當推量の噂をするものがあつた、中にも梅といふ女などは、いつも影に廻つては滿璃子の惡口をいつてゐたが、その晩も門の處に立つて、誰か來たら話してやらうと思つてゐた、すると暫く經つて町の方から丈の高い男が、外套の襟に顔をうづめ軟らかい帽子を眉深に被つてお梅の方へ近づいて來た、お梅はその様子を見て誰かといふ事を直ぐ知つて、そして行きなりその男の首にぶら下つて

『おや伯爵の御前、貴方が見るとは思はなかつてよ』

と狎へる様な調子でいつた

『さうか』

とその男は答へたが、別に小間使風情のかく貴族に馴々しくするのを咎めやうとはしない、此男はいふまでもなく西班牙の理髪師伏見侯爵である

『でもよく來て呉れたわねえ』

とお梅はなほ同じ調子で伏見の手を搖る

『鬚を剃つて居たので遲くなつたが、兎に角來るには來た』

といふに、お梅は街燈の光にすかして見ると、成程口鬚だけが殘つてゐる

『まあ殘念な事をしてねえ、黒い鬚がようく似合ふのに何故鬚なぞを剃つて』

『その黒い鬚が目立つから剃つたのだ、今晩から隱れなければならん程多くの敵が出來たのだ、種々幸福な事や面白い戀物語もあるがどうも之れには危險が伴つて不可』といふ伏見の言葉は滿足さうであつた、お梅は其麼事には注意しないが、然も矢張滿足さうに

『本當に御前の仰有る通りだわ、女といふ女は伯爵にあへば半狂人になるんですもの、夫のある者でも、子供のある者でも、皆な見さかひが無くなるから驚いて了ふ、でも私ん處の令嬢だけは不結果で

したねえ』

『令嬢？』と伏見は不思議さうな顔をして、『お前の處の令嬢……？

令嬢は返つたか？』

といつて、狐にでも魅まれた樣にきよときよとお梅の顔を見入つた

得能の素性

お梅も不思議さうな顔をして、暫らく伏見の顔を見てゐたが

『何ですつて、令嬢は返つたかですつて？……莫迦に仰山な事を仰有るぢやありませんか、返るも返らないも一寸散歩に出たばかり

りですよ、そしてね伯爵、それはもう根つから運轉手に惚れて了つたの』

『ほう然うか』と伏見は一寸考へる樣な風をしてゐたが『運轉手といふと、その今度來たといふ新運轉手にか……、時にお前に賴んで置いたその新運轉手の寫眞はどうした？』

『寫眞？そりやもう大丈夫よ、私のこつてすもの間違つこはありやしないわ』とお梅は自慢さうに大聲で話す

『おい〳〵、もつと小聲で話せ』と伏見は制して『大丈夫よの請合ばかりぢや安心出來ない、實際寫眞を見せないぢや駄目ぢやないか』

といひながら、伏見はポッケットから何程かの金貨をつかみ出して
それを女の手に握らせた
お梅は嬉しさうにニコ〳〵して
『今お目にかけますよ、私ね、邸の執事と親しくしてるもんですから
らね、それで巧く寫眞が貰へましたの、運轉手が令孃と列んで自働
車に乗つてる處を、邸の執事が撮影しましたのよ、そら御覽なさい
よ、ね』とお梅は一葉の寫眞を差出した
伏見はその寫眞を受取つて、街燈の光に一目見るや喫驚した
『此男が運轉手なのか、え？運轉手の得能つていふのは此男の事か

名が違ふ、確かに名が違ふ、私はよくは此男を知つてゐるが、お前
此奴はひどい惡漢で、いつも私の妨害をする奴だ！』
と激していつたが、また心の中でひそかに考へた
『渡邊柳子の阿魔め、此馬鹿者の愛を得たいばつかりに我輩を瞞し
たのだ、莫迦々々しい、爵位と顔との外に何處にとり柄があるのだ
けれども此奴あまり馬鹿にや出來んぞ、柳子を我輩より離して今ま
た滿璃子を奪はんとしてゐる、畜生奴、滿璃子は確かに我輩に從は
うと思つてゐたに、急に樣子が變つたのは此奴の爲だな、して見る
と此奴は稀代の色魔だわい、どうして呉れやう、それから探偵のい

ふ處によれば、侯爵夫人綾子が我輩を憎からず思つてゐるが、結婚は六ヶ敷からうといふ、しかも彼奴、我輩の爵位の事も、本國へきいて知つてるとの事だつた、畜生め！彼奴と此奴と同盟してゐるとすれば、こりや些と我輩の立場も怪しいわい』

伏見は斯く思ひつゞけて、呆然として夕暗の中に立つてゐた

怪しき訪問客

その樣子が何となくもの〳〵しいので、お梅も暫らく默つてゐたが、やがて耐らなくなつて聲をかけた

『ねえ伯爵、何を其麼に考へてゐらつしやるの？私ん處の令嬢が運轉手に惚たから、それが貴方の氣に入らないのでせうねえ、運轉手なんかに惚れるなんて、誰がきいたつて癪にさはるわ、まして貴方は何ですものねえ、ほゝゝゝ』

けれども伏見は物をいはない、默つて相不變立つてゐる、お梅は更に言葉をつぎ

『それはさうとしてね、先刻二人が返つて來ると、それも朝出る時は自働車だつたのが、歸つた時は馬車になつたのよ、そして二人が歸つてくると、令嬢はね、運轉手を一番立派な客室に入れました

よ、何でも遠乘の時に事件があつたと見えてね、運轉手は肩に繃帶してゐますのよ』

『え、繃帶？』

と伏見は耳をそばだてた

『えゝ、何か傷でも受けたと見えて、大事さうに繃帶してゐるわ、そしてね、それを又令孃が心配するつたら非常なんですよ、まるで傍で見てゐる人が氣がひける樣で、そりやもう厭らしい、惚れるつてあんなに打ち込んで了ふもんかと思つて私は怖くなりましたわ』

『うゝむ』

伏見はまるでお梅の言葉などは耳に入らぬらしく、齒を切しばつて呻吟つてゐる

『ほゝゝゝゝ』とお梅は笑つて『御前、何を？』

『うゝむ、畜生死んでしまへ、健康になつたらその時は殺してやるぞ！』といふかと思ふと、お梅の前にゐるのなどには氣付かぬ如くそのまゝ何處へか駈け出して了つた、お梅はまるで狐につままれた樣で、少しもそのわけが分らなかつた

伏見が駈去ると同時に、非常に汚れた服裝をした女が反對の方から近づいて來た、此女は今駈け去つた男には氣が付かなかつたらし

い、たゞ此邊の町や門構などに注意して、だん〳〵池邊邸の方へ近寄つて來る

併しお梅はそれには氣が付かないで、若しや伏見が返つてくるかと思つて、暫らく門の處に立つてゐた、けれども男は返つて來ないお梅は口の中で何か呟きながら、寒さうに肩をすぼめて、邸内に入つて來た

すると其處の玄關口に、今の汚れた服裝の若い女が立つてゐた、女はお梅の姿を見ると

『もし〳〵、池邊樣は此方で御座いますね』と訊ねた

『は、さうで御座いますよ』とお梅はつけ〳〵いふ

『私は大切な用事で參つたので御座いますがね、どうかお嬢さんへ取次いで下さいまし』

『どんな御用で御座いますか』とお梅はおして訊ねた

女は稍々吃りながら

『あのお嬢さんの御存の方の處から參つたので御座いますがね、是非お目にかかつてお話し申したい事が有るので御座います』

女は幾度か同じことを繰り返して、無理にもと取次を求めた

滿璃子と波麻子

夜の事ではあり、且つ風態の怪しい訪問者であるから、女中のお梅はなるべく女を追ひ歸さうとした、けれども怪しい女は頑固に面會を求めて、滿璃子に會はない中はどうしても歸らないといふ、それに繰返し〳〵大切の用事があるといふので若も後で叱られる樣な事があつてはと思つて、お梅も漸く奥へ取次いだ

滿璃子は女を應接間に通させて、やがて自らその部屋にあらはれた

『私が滿璃子で御座います』

と挨拶して、靜かに女の樣子を見た、事毎に脅かされ、驚かされて來た滿璃子は今は落着いて少しも亂れない

『あ、申しおくれました』と女はござまぎして『私は波麻と申します』

『然うですか、で、何か私に御用でも御座いますか』

といひながら、滿璃子は幾らかの金を巾着から出して遣らうとした今の場合、かういふ女の來るといふのは、金でも欲いのだらうと思つたからである

すると波麻子は急にそれを押し留めて

『貴女飛んでもない、私が何で今頃お金の事で參りませう、それよりも貴女には今大敵が御座いますよ』

滿璃子は不思議な顔をして波麻子を見た、金を欲いのかと思へばさうでもない、しかも今迄に見た事もなければ、その名をきいた事もない女が、かういふ事をいふ處を見れば、何か外に仔細が無くてはならぬ、で、急に打解けた樣子をして

『それは私も存じて居ります、今日もねもう怖ろしい、生命も名譽も奪られた樣な目に逢ひましたよ、貴女は何かそれ以外に御存知で

すか』

『えゝもう悉皆知つて居ります、今すぐお話し致しますが、それよりも前に只一つお訊き申したい事が御座います、それは外でも御座いません、伏見とかいふ者が、あの失禮ですが貴女の後を追ひ廻すとかきゝましたが本當で御座いますか』

滿璃子は怪訝な顔をして聽いてゐたが、その言葉の節々に大方の樣子も分つたので、今度は心を許して語り出した

『あゝその事ですか、不幸にもそれは本當の事ですよ、私もそれに就ては困つてゐるのですが、それはもう到底伏見さんのお望には從

へませんよ、あの人は爵位と御様子で他の眼を惹かうとしてゐる様ですが誰だつてさう易々と手に乗る者はありませんからね……、それはそれとして、何か貴女はその事について御用が御座いますか』

斯ういはれて、波麻子は今更の様に蒼い顔をした、武智の用事も滞びてゐる、見捨てられた夫の様子も知りたい、併も昔の伏見の妻だとは名乗らないで、かうしてゐる波麻子は實に辛い、それと同時に伏見が益々憎くなつた、自分を迷はしたもその手である、そしてあんな非道い目に會はせておいて、今も尙その同じ手で露國の名家の令嬢を迷はさうとしてゐる、一層の事すつかり自分の境遇を打

明けやうか、けれども、さうすれば自分の恥になる』と思つたので波麻子は急に話題をかへた

『伏見が貴女に結婚を申込みはしませんか』

その言葉に驚いて、滿璃子は思はずポケットに手を突込んだ

武智の許へ

取出したのは一通の手紙である、それを卓子の上に置いて

『貴女はどうして其麼に伏見に興味をお持ちなんですか』といひながら手紙を波麻子に渡して『然し結婚申込は此手紙にある通り本當

ですよ、けれども私は勿論伏見に對して何とも思つてゐません』

波麻子にはその手紙を讀む勇氣は無かつた、宛然心臟の鼓動も止つたかの樣に默つてゐる、そこで滿璃子は更につけ足して

『今日ですよ、今日最後の返辭をしろといつてゐるのです、丁度外出して種々な目に會つたので忘れてゐたが、女中のいふ處によると今日半日私の家にゐて待つてたさうです、今頃は自宅で待つてゐるでせう』

『自宅といひますと？　伏見はまだ此街に居りませうか』

『多分居るだらうと思ひますが』と滿璃子はいつたが、更に言葉を

ついで『併しあの人は西班牙人でせう、何か貴女は御關係があるのですか』

波麻子は當惑したらしく、何かもぢ〳〵してゐたが

『いづれ後に精しくお話しいたしませう――おや、今貴女を呼んでる樣な聲がきこえましたが……』

滿璃子も波麻子も默つて耳を欹てた、すると今度は明かに得能の部屋から呻き聲が洩れた、それを聽くと滿璃子は電氣にでもふれた樣に立ち上つて、挨拶もせず部屋から出て行つた

後に殘された波麻子の蒼白い唇には、悲しさうな微笑が浮んで、

そして顔には微かに痙攣が現れた

『ほゝゝゝ、矢張噂の通り令嬢の惚れてゐるのは本當だよ』と波麻子は獨語をいつた『惚れてる人があるから、外の男はあの人にとつて價値が無いのだ、けれどもあの女は性質が好くつて、境遇が又好かつたから、とう〳〵他の誘惑にも負けなかつたのだ、しかしまだ〳〵惡漢がついてるのだから、私は生命をかけても保護してあげやう』

波麻子はかういつて、やがて誰に挨拶もせずその部屋を出た、そして夢中で町を彷徨つてゐたが、口の中では幾度も『私は生命を賭

けても此仕事をやつて見せる』と呟いた

やがて波麻子は目的地へ着いた、それは大探偵武智の事務室である、武智は何か滿不ちしい顔をしてゐたが、波麻子が來たといふので直ちにその室に通させた

『や、どうも御苦勞さま、何か新らしい事實が分りましたか、え？私のいつた通りに池邊の令嬢の處へ行つて見ましたか』

『えゝ參りました、滿璃子さんは非常に親切な方です、世間の噂や想像以外に、それはもう實に氣の置けない方です、本當に有難う御座いました、伏見の人格や樣子もすかつり分りました、思つたより

も惡人で、それはもう驚く事ばかりで御座います、かう何事も分つて見れば私はもう世の中に望の無い身體、心おきなく身を殺す決心を致しました』

『え、身を殺す？』と武智は沈着いた聲で『戯談いつちやいけませんよ、貴女の御良人が、伏見さんが立派な人になつて歸つてくるやうにしてあげると、私は約束したのぢやありませんか、え、逸まつてはいけませんよ、まア沈着いて私にお委せなさい』

波麻子の決心

理義明白な武智の言葉も、思ひつめた波麻子の耳には何の效驗も無い、彼女は、深い決心の色を眉の間にあらはして

『いゝえもう駄目で御座います、私も初の中はまだ〳〵と望をかけて居りましてその爲にさん〴〵莫迦にされてゐましたが、今ではもうすつかり分りました、伏見は私を瞞したと同じ手で、これまで幾人の女を非道い目にあはせたでせう、これ程の惡人だといふ事が分つた以上は、譬へ一年でも二年でも、その惡人に連れ添ふてゐた私は、どうして生きて居られませう、父母への申譯、世の中への申譯に、そして身の潔白を明す爲に、私は潔よく自殺いたします』

武智は靜かに波麻子のいふ處を聽いてゐたが、やがて顏をあげて

『それでは子供をどうしますか』

此時波麻子は悲しさうな眼を大く見開き

『今朝故鄕の母から手紙が參りましたが子供は目下病氣で危篤に迫つてゐるといふ事で御座います、醫者もさういつてるさうですから到底もう助かりますまい、その方が却つてあの子の爲には幸福なのかも知れません』

氣丈にかくはいひきつたけれ共、波麻子の眼には美しい涙が輝いてゐる

『然うですか、それはどうも』といつたきり、武智は幾度も溜息を吐いて、深く此不幸なる母に同情したが、斯くては却つてその悲しみを增させるばかりと思つたので、急にその話題を轉じた『で、何か伏見の惡人たる證據を見つけましたか』

『えゝもう彼は今でも昔の癖を止めないで、いろんな女の後ばかりつけてゐるので御座います、芝居に出る賤しい女と手を組むなどはまだしもの事、立派な處の夫人や令孃をも誘惑しやうとするのです私と結婚した時には、牧師立會の上でちやんと神の前に男の貞操を誓つたのですが、あれは全く私を瞞す一時の手段だつたので御座い

ます、殊に滿璃子さんに會ひました處が、あの人にまで手紙をやつてるではありませんか、それがしかも結婚申込の手紙で、至急返辭をしろといふ脅迫がましいもので御座いました、今更ながら、私はつく〳〵伏見の惡黨なのに驚いてしまひました』

『然うでせう、私もそれは夙くから知つてゐた、併し御安心なさいもう彼を都の外へ追ひ出す計畫がしてあります』

『いゝえ、その計畫は不成功で御座いませう、伏見はまだ都に居ります』

『え、まだ居る？　それは本當ですか』

と武智は不審氣な顏をして、じつと波麻子の顏を見つめた

『本當で御座います、滿璃子さんへの手紙にも書いてありましたが伏見はまだ家にゐて滿璃子さんの回答を待つてるさうです、それに今日は半日も池邊邸へ行つてゐて、滿璃子さんの歸りを待つてゐたといひます』

『はゝあ』といつて武智は膝をうつた

『彼奴滿璃子の家へ行つて樣子を見て、外での出來事如何により臨機應變の仕事をするつもりだつた』と心に思つた

『それを私は報告に參たつので御座いますが、都を去らない中に彼

を捕へて一日も早く刑に處せられるやう望みます』

『え、それは貴女の本當の望みですか』

と武智は殊更に訊いて見た

密雲濃霧

波麻子は武智の言葉に却つて不審さうな顔をしてゐたが

『本當ですとも、貴方は私が、私の生命を奪つた良人の戻つてくるのを願つてるとお思ひですか、いゝえ、私はもう復讐心より外に御座いません、もしも私が臆病者でなければ、私は自ら伏見を殺して

了ります』

『いや飛んでもない』と武智は微笑を洩らして『其麼事をすれば貴女直ぐ牢舍へ入れられます、まア私に委せてお置きなさい、まだ都にゐるならば、必ず私が取りおさへます、それから貴女は和田夫人の處へ行きましたか』

『は、參りました』

『どうでした樣子は？』

『あの人はまるで狂人です』と波麻子は思ひ出した樣に叫んだ『あの人は何でも强盜か何かを雇つたやうです、伏見も此事に關係して

ゐると見えて、彼の使ふ莫大のお金は和田夫人から出でゐる樣です、それから夫人は滿璃子さんに對して何か惡い企をつゞけてゐるやうに見えます、兎に角今一度行つて探りませう』

といつて波麻子は座を立つた、そして部屋を出て行くと、その出あひがしらに加藤の入つてくるのに會つた、波麻子は輕く會釋して出て行くと、加藤は同情してその後姿を見送つた

『おい加藤』と武智は椅子から立上つて聲をかけた『さあ行かうぢやないか、これから大分用事があるぞ、滿璃子と運轉手は比較的安全の地位にゐるし、殊に波麻子がついてるから大丈夫だが、我々は

先づ第一に伏見を拘引しなけりやならん、早く檢察官の處へ行つて令狀を取つて倶樂部か賭奕場で見つけやうぢやないか』

といひながら階段を下つた

『先生、それは私が引受けませう、うまく彼奴の友人に訊いたら、大抵その在所が分りませう』

『よろしい、ぢやアそれは君に任せる、それから僕は例の林の家で待つてるからね、何か急用があつたら彼所へ知らせ給へ、若し又僕がゐなかつたら、きつと僕の身に兇い事が起つてゐるのだから、そのつもりで探して呉れたまへ』

『先生、おどかしちやアいけませんよ』

と加藤は笑ひながら、『では其所まで御一緒に參りませう』

『はゝゝゝ』と武智は笑つて『僕だつてどんな危險に出會はんとも限らんさ、が、まア心配はいらんよ、もう斯うなりや占たもんだ』

二人は併んで警視廳の門を出たが、すぐ其所の横町に入ると、武智は加藤に向つて

『ぢやアしつかり遣つて呉れたまへ、さよなら』

といつて別れた、加藤は暫らく武智の後姿を見送つてゐたが、やがて自分の目的地に向つて行つた、風か、雨か、都の空をとざした黑

雲は益々その色が濃くなつて行く

綠倶樂部

武智と別れた加藤は、先づ足を倶樂部に向けた、勿論倶樂部に於いて伏見排斥の聲は起つてゐる、けれどもまだ除名したわけでないから、茲處へ行けば大體の消息は分ると思つたからである、それは滿璃子から和田博士に宛た手紙なども、多くは倶樂部で拔き取られたが、それにも伏見が關係してゐるらしい、だから先づボーイに就てきけば、精しい事は兎も角も大體の探偵方針だけはつくに相違な

い、かう思つたので加藤は急ぎ足に倶樂部へ行つた

倶樂部にはもう常客の紳士連が集つてゐた、華やかな電燈の下に高談放論してゐる者もあれば、喫煙室に卓を叩いて氣焔をあげてゐる者もある、さうかと思ふと骨牌の勝負に忙がしい者もあれば、球突のキユウを流々としごいてゐるものもある、コニヤックやブランデーに微醉の紳士は、うろ覺えの農夫の歌に通を振り廻してゐる、總じて日の光の弱い、吹く風の荒々しい露西亞にあつては、夜の電燈の下に交際社會の華々しい天國を描き出す、併し加藤はわざと知人の眼を避けて、一人のボーイに話しかけた

『君、一寸訊きたい事があるんだがね、まあ一杯飲まうぢやないか』

といひながら、ポツケットに手を入れてちやら〳〵と音をさせた、

ボーイは一寸怪訝な顔をしてゐたが、錢の音に急に莞爾して、音なしく後について來た

加藤はボーイと二人で倶樂部を出て、直ぐ近所の小さな料理屋に入つた、そして一二杯飲みながら

『時に君は伏見伯爵を知つてゐるかね』

『へい、よく存じて居ります』

『此頃何をしてゐるか知つてゐるだらう』

『さうですなあ、この二ヶ月ほどは餘り來ませんが、何でも外國へ行くとかいふ噂をきゝましたよ』

『それあ本當だらうか』

『いゝえ何が當になるもんですか』とボーイは笑つて、稍〻赤くなつた顏をなで廻したが、『私は確かに伯爵が和田博士の處へ行つたのを見ましたよ、丁度先刻の事があつて博士邸へ參りますと、博士は朝から不在だといふのです、そこで歸らうと思つてると、そこへひよつくり伏見伯がやつて來ました』

『ふうむ、ではまだ博士邸にゐるだらう、早く行つて會はなければ

ならぬ、私は伯爵殿に是非話したい用事があるのだ』

といつて、加藤は椅子より立上つた

『いえ加藤さん』とボーイも椅子より立上つて『到底侯爵を見つける事は出來ませんよ、私も伯爵に用事があるのですがあの人はまるで狐の樣に狡滑で、漸く姿を見かけたと思ふと、もうその時に遁げてゐます實は私もあの人に少し許りの金を貸してゐるのです、あアいふ立派な人が困るからといふのでせう、貸さなければ後が怖う御座いますからね、處が今以て御返し下さらないのです』

『はゝゝゝ』と加藤は笑つて『まア御安心なさいだ、若し伯爵が

和田夫人から金が取れなかつた時は、君の貸した金は、君の耳と同じ様に到底見ることは出來ないね』

和田博士邸

妙な事をいふ人だと思つて、ボーイは凝と加藤の顔を見つめた

『何ですか、私と和田夫人と何か關係でもあるといふのですか』

『いやその意味ぢやない、伯爵と和田夫人との間には、何か金錢上の關係があるらしい、が、兎に角夫人は良人の博士を愛してゐるが伯爵は自分以外の何物をも愛さないといふ人だ』

と終の方は口の中でいつた

『いえ違ひますよ』とボーイは笑つて

『伯爵は非常に女好きです、女がゐなければ夜も日も明けないといふ人です、だからあの人を探す時には、先づ女のゐる處へお行でなさい、あの渡邊柳子といふ樣な人の處へ行けば、屹度伯爵を見つける事が出來ます、はゝゝゝ、現に柳子も暫くの間怖婦になつてゐましたよ』

『あアそれか、それはもう昔の事だらう、柳子は伯爵がいやになつて、今では本野伯を手に入れやうと焦つてるといふぢやないか』

『えゝ、それはもう手に入れたんですよ、けれども本野さんは金がないといふではありませんか、それに御家族の間もあァいふ風にもめてゐるといふので、柳子はまた外の人に見かへた樣子です』

かく話してゐる間に、加藤はつか〳〵と部屋を出やうとした、それを見るとボーイは周章はてゝ

『加藤さん、何處へお行でになります』

『僕は下らない世間話を聽く暇は無よ』

と加藤はにやり笑つて『それよりかも郵便を受取つてる同僚に氣をつけ給へよ、和田博士宛の手紙をすつかり妻君へ渡して了つたといふぢやないか、武智さんはさういふ奴を更迭するといつてゐる

斯ういひながら、加藤は幾らかの金を料理屋に拂つて、それから博士邸へ行つて見やうと思つた、ボーイのいふ處に從へば、伏見は先刻和田夫人の處へ行つたといふ、早くその在所を突き留めたいもんだ『けれども先生が今夜彼奴と逢ふ處を想像すると、何となく背中に蟻でも這つてゐる樣にむず搔い』と獨語ちた

夜はだん〳〵更けて行く、それに大都會といつてもペテログラードの夜は實に靜かである、大通りでさへも忽ち戸を閉るのであるから、まして小路の夜は更けるのが早い、勿論屋内には華やかな電燈

も輝き、一家和樂の笑聲も賑やかだらうが表の戸はひた〳〵と閉ぢられて宵の口にもう夜更を思はせる、その暗い横町を加藤は影の樣に辿つて博士邸へ急いだ

『博士はもう歸つたらうか』

といふのが第一の疑問だつた、八幡の森の一幕はうやむやの中に濟んで、その解決はまだつかない、が、病院で得能には會はなかつたが、彼等の生死は最早心配はない、ただ汽車で歸つた三人は、停車場でそれ〳〵別れて了つたが、博士はそのまま眞直に家へ歸つたらうか、歸つたとすれば、丁度伏見にでも會ひはしまいか、兎に角早

く行つて見やうと、加藤は思ひながらすた〳〵道を急いだ

やがて博士の邸に近づいて、玄關に案内を乞はうとした時、一人の男が中から現はれた、頭には自働車乘用の帽子を戴いて、青い玉の眼鏡をかけてゐる、此男は門の處で立止つたが、こちらの樣子をすかし見て

『おや、貴方は加藤さんではありませんか、何か急用でも起りましたか』

といひながら近づいて來た、和田家の自働車運轉手である

道化役者

加藤は莞爾にほゝ笑んで

『いや、別に急用といふ事も無いがね、何かお前さん處に珍らしい事でもあるかと思つて遊びに來た、博士はもう歸つたかね』

運轉手は滑稽な身振をして

『いえ未だ歸りませんよ、何でも情婦か何かの處へ行つたのでせうへゝゝゝ、ところが夫人は狂亂の姿です、全くどうも女房なんか貴ふもんぢやありませんな、女つて奴、兎角一生涯の鎖になつて、う

まく一生を蝕らして行きますよ』

『はゝゝゝゝ』と加藤は笑つて、『まさかお前さん處の夫人のやうに皆なさう嫉妬深いわけでもあるまいよ』

『さうかも知れませんな、けれども此嫉妬といふ奴、全くどうも莫迦々々しいもんですな、處でその嫉妬の火に胸を焦してる夫人の處へね』といつて運轉手は聲をひそめ、何か大事の事でもあるやうに前後を見廻して『毎日々々何とか伯爵といふのが遣つて來ますよ、そして何時も一時間以上も坐つてゐるが、何か惡い事でも計畫でるに相違ないと私は睨みましたがね』

『さうか、今もその伯爵は來てゐるかね』

『いえ今は居りません』

『では何處にゐるかお前さんそれを知らないかね』

『えゝ知りませんよ、けれどもねえ、今夜もまた私は莫迦々々しく夜を潰さなきやならないんですよ、夫人は此頃になつてよく夜の散歩に出ますがね、今夜もまた何時でも間にあふ樣に自働車を用意して置けといふのでさア、全くやりきれませんよ』

加藤は耳を傾けて注意深く聽いてゐたが急にニコ〳〵して

『そりや本當かね、全く遣りきれないだらう、ところでお前さん今

出かけやうといふ處なのか』

『然うですよ、今夜に限つて殊に閉口してゐますよ』と運轉手は當惑らしい顏をして『實は私少し舞踏が好きでしてね、その時間が無いので困つてゐます、殊に今夜はね、そら例の湖月に舞踏の大會がありまさア、あれには是非出やうと思つてゐたに、此始末ぢや全く殘念ですよ、彼處は別嬪が澤山ゐますぜ、はゝゝゝゝ』

『然うか、それはどうもお氣の毒な事だねえ』

『全くですよ、何處の運轉手だつて貴下さう無暗に夜更けまで使はれる者はありませんよ、若し又急用でもある時はね、その時はそれ

だけの方法もやつて呉れまさァ』

『そこで』と加藤は話頭を轉じて『お前さんは今夜何處で待つやうに命ぜられたね、一體夫人は何處へ行かうといふのだい？』

と加藤は何氣なく訊ねた

偽運轉手

好い話し相手を得たと思つて、運轉手はなほも話しつゞけた

『何處つて？　それァ誰にも解りませんよ、貴下は御存知あります まいが、金持の夫人なんてものは飛んでもない、命令を出すもので

す』

『ふうむ、まあ如何な具合だか話してきかせたまへ』

と加藤はわざと好奇心の眼を光らせた、運轉手は忽ち乘氣になつて

『例へばね、時々電話をかけて自働車を持つて來いといひます、ある時などは夜の二時頃にXY橋の處で待てといひ、或る時は郊外の林の外へ來いなどゝいつた事があります』

『はゝあ、それァ容易の事ではないね、で、お前さんはさういふ時いつでも出かけるのかね』

『えゝ出かけますとも、行かなければそれこそ夫人が大變ですもの

今夜も多分其處こッてせう、全くどうも耐りませんよ、人ッ子一人通らない夜更けに、月のかすかな田舍道や、又は眞暗な街などを通る時は、全く狂人にでもなりさうな氣がしますよ』

運轉手はかう云つてさも壓さうに身慄ひをした、その心の中には華やかな舞踏場と、白い胸を出した舞姫と、それから琥珀色の火酒の瓶とが映つてるに相違ない、その美くしい歡樂の巷に引きかへて荒涼たる夜更けに、厭な務をしなければならないのか、運轉手はかう思つたので、暫く言葉もでなかつた

加藤はそれを待つてゐたのである

『おい君、い丶事を敎へやうか、お前さんは舞踏場へ行きたいのだらう、だから今夜だけ僕が代つてやらうぢやないか、お前のその帽子と着物とを僕に貸したまへ、僕がお前さんになつて行つてやらう何でも夫人の命令する處へ自働車をもつて行けばい丶のだらう』

『これは面白い』

といつて運轉手はニコ〳〵した、彼の目の前には忽ち舞踏場の光景が現れた、もう某家の運轉手もゐる、某家の馭者もゐる、皆な思ひ思ひの女と手を組んで、笑ひ興じながら踊つてゐる、彼は急いで其處へ飛んで行きたかつた、と思ふと美くしい光景は忽ち消えて、又

運轉手の顔には雲がかゝつた

『併し加藤さん、代つた事が分れば私は早速免職されますよ』

『なァに大丈夫だ、若し又免職になつたら、武智さんに賴んでいゝ處へ世話してあげやう、兎に角早く着物をよこしたまへ、その方がお前さんも早く湖月へ行けるし、僕もまたその方が面白いからね』

『然うですか、ぢやあお賴み申しませうかね、けれども……』

といつて尙も運轉手は落付かない

『大丈夫だよ、早くそれをこつちへ渡したまへ』

と加藤は先づ帽子をとつた、それに機を得て早速電話室に入り、す

つかり着物を着かへて、運轉手はよろこび勇んで出て行つた

加藤は手を拍つて『ヤ、うまい事をやつたぞ、これで先づ夫人の後をつける事が出來る、和田夫人は怪しいと先生もいつてゐたから何か今夜は得物があるに相違ない』と呟きながら、忽ち和田家の運轉手に變裝した、そして椅子に腰をかけて、かくて來るべき『時』を待つた

再度の訪問

その夜も稍々更けた十一時頃、波麻子は再び池邊邸に滿璃子を訪

ふた胸には深い決心の緒を堅めて、身を碎いても悪人等の裏をかゝうと思つたからである

夜更けての訪問であるが、滿璃子は未だ寢もやらず得能の傍に侍してゐた、そして波麻子の心の善い事は見て取つたので、心おきなく面會した、これに數時間前に會つた時、不意に得能が呻吟したので、そのまゝ波麻子とも別れて了つたが、何かあれ以上の用事があつたに相違ない、それも精しく訊いて見たいと思ふので

『先刻は失禮いたしました』

と滿璃子は莞爾にほゝ笑んで、いきなり波麻子の手を握つた

『いゝえ私こそ飛んでもない失禮をいたしました、あの時は何だかもう心が落着きませんでしたから』

波麻子の聲にはいふばかりなく沈痛の響を帶びてゐる、その顏は蒼褪めてゐるが、唇のあたりきと引きしまつて、瞳の中には無限の意味を湛えてゐる、滿璃子はその顏をつくゞと見て、只何となく頼もしい氣持がした

『あの時急にお歸りなすつたものですからね、私はどうなすつたかと喫驚いたしましたよ』

と滿璃子は懐かし相に語り出した

『本當に大變失禮致しました、實に急に武智さんに會ふ用事が出來ましたものですから』

『え、武智さんに？武智さんといふとあの警察の方で御座いますか』

滿璃子は不思議な顏をして波麻子を眺めた、その朝よりの出來事の、餘りに急激にして餘りに不思議ではあるが、之が爲に如何に武智が苦心してゐるかといふ事は知らない、まして波麻子が武智と共に働いてるとは知らう筈がないのである

『えゝ』といつて、波麻子は急に氣がついた樣に、『私は今武智さんと一緒に働いてるので御座います、それには種々理由も御座います

が、武智さんが今度の事件に苦心して居られる事は非常なもので御座いますよ』

『まあさうですか、私は又餘り非道い目にあつたので、まだ何が何やら少しも分らないのですよ』

『さうで御座いませうとも』といつて波麻子は何か考へてゐたが、

『今日の御遭難にはね、それあ種々な人が關係してるので御座いますよけれどもその張本人はあの伏見に相違御座いません』

『えゝ!? あの伯爵が？』

と流石の滿璃子も仰天した、平生より蟲の好かない男とは思つてゐ

たが、伯爵ともいはるゝ者がどうして其麼事を企てたらう、それが滿璃子には不思議でたまらない

『お驚きなすつたでせう、けれども滿璃子樣、あれは伯爵では御座いませんよ』

『え？　伯爵では無いんですつて！』

滿璃子は半信半疑の間に迷はざるを得なかつた

『然うですとも』と波麻子は言葉に力を入れて『あの男は西班牙の理髪師だつたので御座います』

『まあ……？』

といつたきり、滿璃子はつぐべき言葉が出なかつた、室内の電燈は暗く一つ瞬いたが、直ぐ又明るくなつて二人の姿をはつきり描き出した

波麻子の苦衷

『嘸喫驚なすつたで御座いませう、けれども之には深い仔細があるのです、まあ私の生ひ立ちを一應お聽き下さいまし』

斯ういつて波麻子は再び語り出した、その身は波蘭に生れた事、伏見の甘言に欺かれた事、父母を捨てゝ二人西班牙にのがれ、其處

で牧師立合の上結婚式を擧げた事、それから子供が生れるや、伏見は忽ち波麻子を捨てゝ佛蘭西に遁げた事、それからの困難、已むなく故郷に歸つて子供を父母に托し、遙々露西亞まで尋ねて來た事、來て見れば伏見は伯爵と名乘つて樣々な惡事をしてゐる事を簡單に語つた

『まあどうしたら好いでせう』

滿璃子は事毎に驚かされて、全くいふべき言葉を知らなかつた

『さういふわけで御座いますから、伏見は私の操を破り名譽を奪つた一生の敵で御座います、ですから私は武智さんに願つて、是非伏

見を捕へやうとしますが、何處へ隱れるのか行方が分かりません、けれども私は何處までも探し出すつもりで御座います』

『ま然うですか、本當に驚いて了ひますねえ』

『それに故郷に置いて來た私の子供も、病氣で死にさうだといつて居ります、今頃はもう死んでゐるかも知れません、結句その方があの子の爲にも好かつたので御座いませう、ですから私は命にかけても敵を捕へねば承知出來ません』

『まあ然うですか』と滿璃子は幾度か感嘆して『本當に不幸なのは貴女で御座いますねえ、御境遇といひ、お子供といひ……』

順境に育つただけに、滿璃子は世の波も嵐も知らない、その眼の前へかうした悲慘な女が現はれたので、初めて世の姿を見た樣な氣がして、滿璃子は一層同情に堪へなかつた

『私の事は之れ丈で御座いますが、伏見の惡事はこれからで御座います』と波羅子は沈んだ聲で語り出した『今日の御遭難ですね、あれには確かに伏見が關係してゐる樣に思はれます』

滿璃子に結婚を申込んだ處を見れば、鳥渡さうらしくは思はれないが、それは女たらしの例の手段であらう、殊に萬一にも財產家にして名流の池邊家に入る事が出來れば、思ふまゝに交際社會を荒す

事が出來るけれども、伏見はその方面ばかりを窺ふ者では無い、その上和田夫人傳子と何事か結托してゐる、和田夫人は非常に嫉妬深い女で、殊に博士と滿璃子との間を疑つてゐる、して見れば伏見がその手先になつて、どんな事を計畫でゐるかも知れない、殊に滿璃子より博士への手紙は和田夫人が倶樂部のボーイを買收していつも先へ見るさうだ、之等の事を綜合して見ると、どうしても今日の騷動は伏見等の仕事らしい

『それに相違ありませんよ、伏見は自分の利益の爲にはどんな事でもする男ですから』

と波麻子は事の順序を精しく語つた、驚愕と好奇とに眼を圓くして聽いてゐた滿璃子は

『まあ本當に喫驚いたしますね、私些とも知らなかつた、さういふわけなら之からだつて仇をしないとは限りますまい、まあどうしたらいゝでせう』

氣丈の女ではあるけれども、殘虐極りなき伏見等の惡計には、流石に戰慄せざるを得なかつた

滿璃子の逃走

暗き夜である　外には今如何なる妖魔が横行してゐるだらう、四街道のアークライトは物凄く瞬いて、犬の遠吼が折々靜かな町々に反響する

滿璃子等はなほ應接室に對坐して語つてゐるのである

『それに就きまして』と波麻子は更に言葉をついだ、『武智さんは早くから此事に氣がついて居たので御座います、で、伏見の素性などもちやんと調べて置きましたが、確かな犯跡か分らないので其まゝにして置いたのださうです』

『さうですか、本當に武智さんの機敏には驚いて了ひますねえ』

と滿璃子は愈々驚いてゐる

『併し伏見が貴女をつけ覘つてゐるといふ事は明なので、萬一の事があつてはと本野さんを貴女の保護につけて置いたのださうです

よ』

『本野さん？本野さんて誰ですか』

滿璃子には何の事か分らない

『あ、貴女はまだ御存知ないんですか、そら、あの運轉手の得能さんあの方が本野伯爵で御座いますよ』

滿璃子は美しい眼を大きく睜つて

『あ、然うですか、まあ、さうですか』

と幾度も嘆息した、得能が普通の人でないといふ事は初めより知つてゐる、又得能の口からも聽いた、けれども遭難以來いろ〳〵取込んでゐて、まだ何も訊く時間がなかつた、そして兎に角得能さん得能さんと呼んで來たのに、其の人が本野といふ伯爵だつたのかしかも自分を救ふ爲に武智さんと相談して、假に運轉手となつて入つて來たのに、其の身分あり大恩ある人を、一時と雖も無敎育者などゝ思つたのが申譯ない、滿璃子はかう思つて再び嘆息した

『處が今日の樣な御危難に遭つたのでせう、幸に御無事でお歸りに

はなつたけれども、惡人共は未だ此ま〻では置きますまい、殊に和田博士の夫人は、極度に貴女を憎んで居るから、屹度何か仕かけるに相違御座いません

『まあ、あの傳子といふ方がですか』

『え〻、實は私先刻あの人に會つたので御座います、そして秘かにいろんな事をき〻ますと、それアもう恐ろしい事をいふのですよ、嫉妬からでは御座いませうが、まるで半狂亂の姿になつて、どうしても貴女を生かしては置けないといふのです、それではどうするかと申しますとそれは恐ろしい顏をして、もうそれ〴〵手筈がきまつ

てるといふのです』

『では私はかうしては居られませんね』

と滿璃子は不安らしい顏をして

『眞實ですよ、ですから一刻も早く玆處をお發ちなさいまし、後は私が引受ませう、それに伏見が本野さんの事を知ればどんな仇をするかも知れません、だから御一緒にお發ちなさいまし、ね、一刻も早く、後は必ず私が引受ます』

滿璃子は暫く考へてゐたが

『さうすればまた貴女が危險ぢやありせんか』

『いゝえ私は大丈夫で御座います、さ、一刻も早くお發ちなさい』

□　□　□　□　□

三十分の後、一輛の自動車は池邊邸の門を出でゝ、忽ち闇の中へ疾走し去つた、滿璃子の去つた後で波麻子は滿璃子に假裝した

深夜の慘劇

夜の雲は低く垂れて、滿都の甍は今正に夢深からんとする、北國の夜はさらぬだに物凄きに、此厄つ日を送つて此災つ夜を迎へた今は、沈々たる夜氣の中にも、人魂の頻りに迷ふやうに思はれる

此閑寂たる闇を破つて、忽ち池邊邸に近づく人の足音がした、やがて玄關口に現はれたのを見れば、それは一人の女裁縫師である

呼鈴の音に應じて、一人の女中が眠さうな眼をして出て來たが

『おや何誰で御座いますか』

『あの私は洋服屋で御座いますが、お嬢樣はお在で、御座いますか夜中伺へとの事で御座いましたから』

『あ、さうですか一寸お待ち下さいまし』

といつて女中はひつ込んだ、その間に裁縫師はあたりの樣子を見廻した、微かな電燈の光にも、其の眼は異樣に輝いて見えた

『あの、洋服屋が見えました』

と女中は恭しく滿璃子に取次いだ

『あ、然う、こちらへお通しなさい』

滿璃子に假裝した波麻子は、其の樣子といひ態度といひ寸分本物に變らない

『餘り遲う御座いますから、今夜は此ま〻歸しては如何ですか』

『い〻え夜分來いといつてあるのですから、直ぐこ〻へ通して』

『はい』といつて女中は再び玄關へ出た、やがて女中に伴はれて入つて來たのは、巧に裁縫師の服裝をした傳子である、蒼褪めてる頰

の色にも、絶えず痙攣を起してる口元にも、それから何となく落着かない眼元にも、何となく啻ならぬ樣子が見える、波麻子は直ちに傳子なる事を見て取つた、けれども何氣ない顏をして

『洋服屋さんですか、夜分お呼び申して失禮ですねえ』

『どう致しまして、毎度御贔負にあづかります』

と傳子はなるべく下を向いて氣どられまいとしてゐる、これはその晝滿璃子が洋服屋を呼んだのを探知して、巧に之を買收し、かくは變裝して來たからである

『さ、も少しこちらへお寄りなさい』

『はい』と顔をあげて滿璃子を見ると、端然と坐れる姿が如何にも美くしい、傳子は今更の樣に嫉妬の焔の燃え上るのを覺えたがじつとそれを押し鎭めて

『御用は何で御座いますか』

といひながら一足近寄つた、滿璃子は側に置いた洋服を取上げて

『此洋服の具合が不可んですがね、一寸見て呉れませんか』

『はい、承りました』

といつてそれを受取つたが、見る樣子をして傳子はキラリと短刀を引拔いた、閃閃たる白光が電燈の光に相映じたと思ふ間もなく、波

麻子の胸には鮮血がさッとほどばしつた

池邊邸で上を下へと大騷動を初めた頃は髪を振り亂して半狂亂の姿となつた傳子の姿はもう見えなかつた

一小爭鬪

探偵武智は加藤と別るゝや、直ちに別方面に向つて活動を開始した波麻子の言葉によれば、伏見は今日半日を池邊邸に費したといふそれならば未だ都にゐるのは確かだ、それに先日警視廳へ呼で詰問した時わざとM侯爵夫人の話をして活路を與へて置いた、だから伏

見はそれを以て此方を欺いたと思ひ、平然として都にひそんでゐるかも知れない、兎に角今日の事件があつた上は、一刻も早く彼を捕縛しなければならない、幸に倶樂部の方へは片腕とも頼む加藤が行つて呉れたから自分は他の方面――總ての犯罪者の必ず赴く、酒と女と、賭博との方面を探そうと思つて――先づ有名な蛇鳩倶樂部へ行かうと思つた

で、横町を出ると間もなく、辻待の馬車を呼ばうとした、けれどもいつも客待をしてゐる處へ行つて見ると、たゞ一輛殘つてゐたのが今發車したばかりである、そこで已むを得ず此次の場所まで歩く

事にした、そして急ぎ足にまた横町へ入らうとしたが、ふと後方をふり向いて見ると、一人の男が影の樣に自分に添ふて來るのが見えた

『蹌けるな！』

と武智は思つたが、此方は氣の付かぬ風をして悠々と進んだ、五六町行つて又振り返ると、黑影は尙も武智の後を追つてくる、其處で武智はひらりと傍の小路へ折れて了つた

『畜生！　人を馬鹿にしてゐる』

と呟きながら、今度は足を早めて蛇鳩倶樂部の方へ急いだ

『兎に角伏見の奴は惡人だ、秘密結社とか虛無黨とかいふのではないが惡事にかけては非凡な手腕を持つてゐる、殊に女に關した惡事ばかりだから驚く、今日のやり方なども巧いものだ、自分は滿璃子に結婚を申し込んで、然も半日も池邊邸に坐り込んで決答を待つてゐる、そして一方には滿璃子の行方を探知して置いて之を郊外の林間に殺さうとする、誰が見たつて一寸伏見の仕事とは思はれない、なか〳〵大膽な惡漢だわい、その上犯罪を現はさないで、傲然と伯爵面をしてゐる處が偉い、けれども待てよ、今一瞬の後には我輩の手中に捕へてやるから』

武智はこんな事を考へながら道を急いだ、ふと氣がつくと、一方に樹立を控へて、軒燈の少ない裏街の樣な處へ來た

『何處だらう！』と思つた瞬間に、彼はズドン！と一發耳をかすめた銃聲を聽いた、ひらりと武智が身を地に伏せた時には、更に第二の銃聲が物凄く響いた、武智は忽ち身を飜へして傍の立樹を小楯に取り、ひそかに彼方を窺ふと、雲衝くばかりの巨漢が三人ばら〳〵と驅け寄つて來た

『おい、確かに手答があつたぞ！』

『いや居ない、用心しろ！』

と惡漢が互に戒めあふ刹那、さッと樹影から懷中電燈の光が射して鐵の如き拳がグワンと一人の鼻先を撲つた

『あッ！』

と一聲叫んで倒るゝ間もなく、武智は足を擧げて第二の男の弱腰をしたゝか蹴つた、餘りの早業に第三の男は氣を呑まれて、そのまゝ後を向いて逃げ歸らうとすると、武智の逞しい手はもう頸の處へ廻つて、捨身にどんと一間ばかり投出した

夜の賭博場

銃聲に驚いて近所の交番から、忽ち二三の巡査が馳せつけた、そして角燈の光に此場の光景を照らし見て、暫しは言葉を出す者もなかつた

『やあどうも御苦勞樣』と武智は快活らしく聲を懸けた、『僕は警視廳の武智ですが……』

『おや！』とその言葉の終らないのに一人の巡査が口を挿れた『貴方は武智先生ですか、少しも氣がつきませんでした』

『さうか、處でね、今夜一寸事件があつて或る方面へ行かうとすると此奴等が後からつけて來て、玆處で不意に我輩を銃擊したわけさ

で此通りにひつくくつて置いたが、多分伏見といふ惡黨の連類だらうと思ふ、兎に角本署へ連れてつて嚴しく糺問して呉れたまへ、我輩は少し先を急ぐから此まゝ失敬しやうと思ふ』

『さうですか、承知致しました、では御成功を祈ります』

といつて、巡査は惡漢を高手小手に縛りあげ、劔鞘を鳴らして引致し去つた

若しこれが普通の人であつたらどうだらう、忽ち惡漢の爲に取りひしがれて、一發の銃聲の下に倒れたに相違ない、けれども武智に取つては、こんな事は事件にならぬ、宛然赤子の手を拈るが如く、

一瞬の間に三人を打ち倒して、次の瞬間にはもう目的地をさして急いでゐる

最早惡漢の跟ける者もないので、やがて武智は大通りへ出て、其處から蛇鳩倶樂部まで馬車に乘つた

蛇鳩倶樂部といふのは、同じ賭博の倶樂部にしても、餘り上流の紳士の立寄る所では無い、けれどもその盛大な事は非常なもので、最も多い中等社會の紳士連を常得意とし、上流社會の第二の者や、下等社會の金持といはるゝ樣な者を加へて、その間に運用さるゝ金額は莫大なものである、殊に此倶樂部に限つてぞんざいな言葉が通

用され、放肆で、喧騒で、賭博的特色を遺憾なく發揮してゐる、故に面白可笑い事が限りないから、ない〳〵之に近づく貴族も少なくない、勿論伏見などは殆ど公然と茲處に出入する

武智が入つて來たので、一同は

『いよう新米の好男子！』

とうち囃した、けれども誰も立つて話しかけやうとする者はない、孰れも氣狂の樣になつて賽の目を爭つてゐる、武智は結句之れをよい事にして、傍にゐる人の好さゝうな男をつかまへた

『一寸君、茲に伏見伯爵は來ませんか』

『伏見侯……！　いや伏見伯ぢやないかね、伏見伯爵なら終始來るさ』

武智は伏見が茲に於ては伯爵と名乘つてゐるのだなと氣がつき

『あ、その伏見伯爵です、伏見義政と仰有る……』

『伏義か、ベッド伯か、寢臺伯、えゝと、先生今夜は來ませんよ』

武智は一寸失望したが何氣ない顏をして

『あア然うですか、どうも失禮致しました』と挨拶してその儘そつと倶樂部を出た、勿論誰も咎める者もなければ、不思議な奴と思つて見送る者も無い

武智は其處でまた馬車に乘り、巴風風の珈琲店の軒並び町通りを過ぎて、下等芝居の多いバルセロ街へ馬を急がせた

湖月の舞踏會

その時は丁度、波麻子が再び滿璃子を訪ねた時と同じく、夜の十一時頃であつた、武智は熱心に下等芝居を尋ね廻つたが、此淫靡な巷にも伏見を發見する事が出來なかつた

そこで武智は又方向をかへて、今度は湖月の舞踏會へ行つた

『おや、武智先生！』

賑やかな音樂と舞踏の間に、ふと武智はわが名を呼ばれた、驚いてよく〳〵見ると、それは親友和田博士邸の自働車運轉手である

『やあ君か』

といふと、運轉手はのこ〳〵寄つて來て

『先生、先生、秘密ですよ』

と妙な手つきをして、聲をひそめる、武智は不思議に思つて

『何だ、何が秘密なんだ？』

『いやもつと小聲に……、實は私ねえ今夜は主人に内密で抜けて來たんですよ、ですから何卒御内密に……、でないと私首をやられま

さあお願えですよ、どうか助けるともつて主人には御内密に願ひますよ』

『はゝゝゝ』と武智は笑つて『何かと思つたら其麼事か』

といひ切らぬに、運轉手は頬をふくらし

『其麼事かつて、先生なか〳〵、以て其麼事ちや御座えませんよ、これで生命の瀬戸際でさあ、其處をお含みなすつて、何分にもどうか御内密にお願ひ申しますよ』

『よし〳〵』と武智は運轉手の滑稽な手つきを笑つて『それよりもね君に一寸訊きたい事があるんだ、一寸でいゝから外まで出てくれ

んか』

『え、何でげす、外へ、ようがすとも、さあ參りませう』

武智は運轉手を物蔭に連れて行つて

『今の事は秘密にしてやるがね、そのかはり一寸訊きたい事があるんだ』

『へえ、どんな事ですか』

『外でもないがね、君の處へ和田君の留守に度々伏見侯爵が行くだらう』

『伏見……、伏見だか何だか知らねえが折々何とか伯とか侯爵とい

ふのが參りますよ』

『うむ、その侯爵は夫人とどんな話をするね』

『どんな話か些とも知りませんよ、第一その何とか……伏見侯爵といふのが來ますと、夫人と二人ぎりになつて、何かこそ〳〵話をするのでさあ、あれあどうも何か惡い事を計畫んでるに相違御座いませんよ、先刻も加藤さんとお話し爲たんでさ』

『叱！』と武智は聲をひそめて『加藤！加藤が君の處へ行つたのか』

『へえ、實はその加藤さんと代つて貰つて私は玆處へ來たんでさア』

『加藤と君とか、ふむ、大分やつてるな』と半分は口の中でいつたが

『時にその伏見侯爵は今夜こゝへ來て居ないか君は見覺えがあるから分るだらう』

『えゝ分りますが、今夜は確かに見えませんね』

『ふむ、では晝間君の家へ行つたか』

『えゝ參りました、歸る時は大分ニコニコものでしたが、何かうまい事でもやつたんでげせう』

『さうか、ふうむ』

といつて、武智は深く考へ込んだ

武智伏見家に潜む

町々の大時計が眠つたやうに十二時をうつた時、武智の姿はひよつくり伏見の屋敷に現はれた、留守だといふ事はちやんと分つてゐたけれども、若も家へ歸る事はあるまいかと思つて、諸所方々を尋ねあぐんだ末に、ふと思ひついて遣つて來たのである

時に侯爵と名乘り、對手によつては伯爵と名乘り、兎に角西班牙の名門を裝つてゐるだけあつて、流石にその邸宅は宏莊な物を借り受けてゐる、勿論その構造は木造であるが、三階造りの大きな建物

で、窓の具合、露臺の樣子、なか〳〵贅澤に出來てゐる

武智は先づ此家の前に立つて、凝と樣子を窺つてゐたが、中には人のゐる氣はひもない、其處で先づポケットから秘密の鍵を出し、忽ち家の中へ忍び込んだ

武智はゴム底の燈を穿いてゐるので、少しも足音が立ない、それを利用して尙も奥へ進んで行つた、そして又秘密の鍵を出して、今度は寢室の戸をあけた、電燈はわざと點けないで、ひそかに懷中電燈を光らして見ると、片隅によつて二人寢のベットが置かれてある

その側には白布に被はれたソファがあつて、襟衣やズボン下が亂雜

に散らかつてゐる、更にベッドの下を調べて見ると、茲には二三の犯罪用の器具が隱してある

『これだ、彼奴いよ〳〵惡黨に相違ないぞ！』

と小聲に呟きながら、武智は尙もその邊を見廻した

すると此時、忽然として表の戸が明いたやうな音がした、武智は直に懷中電燈を消して、そつとベッドに寄りかゝた、そしてポケットの拳銃を握りしめて、耳をそばだてゝ樣子を窺つた

物音は確かに表の扉が明いたのであつた、つゞいて今度は足音が起つた、その足音は入り亂れて四つらしかつたが、やがて階段を上

つて二階へ來た

『來たらその時』

と武智は落付いて待つてゐると、足音はだん〳〵近づいて、寢室の隣の室へ入つた音がする、と同時に電燈をつけたと見えて、その光線は節孔を通して細く寢室へも射す

武智は音をさせない樣に注意して、そつと隣の室を覗いて見た、それは伏見の書齋と見えて、全體の裝飾もなか〳〵立派なものである、それからよく眺めると入つて來たのは確かに伏見である、今一人の方は女であるが、妙な服裝をしてゐるのでよく分らない

その中に顔をあげたのを見て

『おや、傳子だ！』

と武智は心の中で絶叫した

傳子の顔は恐ろしく蒼褪めてゐる、唇は紫色になつて、齒の根も合はない樣にガタ〳〵と震へてゐる

『其麼弱い事では駄目ですせ、女の一人や二人何です』と伏見は冷笑を唇邊にたゞよはせて叱る樣に言つた

武智は吸ひついた樣に息をこらして耳を欹だてゝゐる

隣室の密話

隣室に武智が潛んで居やうとは知る筈もなく、伏見は傲然として椅子によつた

『和田さん、まあ兎に角お掛けなさい』

傳子はいはるゝまゝに伏見に近い椅子に腰をおろしたが、その顔は實に形容する事の出來ない表情を帶びてゐる、蒼褪めた頰には、時々病的に潮紅を呈して、その度に眼は燃ゆるばかりに輝く、口から頤の邊へかけては、絶えず肉筋が痙攣的に動き、胸の邊は時々大

波を打つて呼吸がせはしくなる

傳子は一時の狂亂にまかせて、前後の見境もなく滿璃子を殺して了つたが、池邊邸を出てほつと一息吐くと共に、再び我に立返つたのである、それと同時に『恐ろしき殺人罪』といふ觀念は、ひし〳〵と傳子の胸を衝いて起つた

『伏見さん、まあ私どうしたら好いでせう』

と傳子はおろ〳〵聲で訊ねる、伏見は冷笑して

『どうしてつて？　今更どうしやうもないぢやありませんか』

『けれども、けれども私は……餘り怖ろしくつて……』

『戯談いつちや困りますよ、あれ程深く思ひ込んだ事をやつて何もさう驚く事はないぢやありませんか』

傳子は深く溜息を吐いてゐたが、風の音にもきよろ〳〵と四邊を見廻して

『兎に角どうにかして下さい』

『はゝゝゝ』と伏見は笑つて『さうびく〳〵する事はありませんよ、茲は私の家ですからまあ安心しておゐでなさい、それよりも、貴女は殺した殺したといふが、實際すつぽり遣つて除たのですか』

傳子はその言葉にまた身を震はせて

『えゝ確かにかう胸の處を衝き貫しました』

といふかと思ふと、その時の光景を思ひ出してか、眼は又嫉妬の焔に輝いた

『はゝあ、それで愈々滿璃子も往生したか』と伏見は口の中で呟いたが、『和田さん、それ程の事を遣つて置きながら、今更びくついては困りますよ』

傳子は此時又蒼褪めた顔をして

『けれども今になつて見れば、もう怖くつて〳〵一刻もかうしては居られません、是非どうにか保護して下さい』

『困りますねえ、けれども斯うなつた上は、貴女も家へは家れますまい』

『えゝ、それは私も覺悟して居ります』

『覺悟してゐる？　それは本當ですか』

『本當てすとも、これ程の事をしては、今更家へも歸れないぢやありませんか』

と傳子は思ひ定めたらしく、きつぱりといひ放つた

『それでは暫く當地を去るんですな』

『ですからそのつもりでは居りますが、私は何處へ行つていゝか少

しも當がつきません、だから貴方にお願ひするのぢやありませんか』

『さうですか』といつて伏見は眼を異様に輝かせ『よろしい、私も遲かれ速かれ一時都落をするつもりだから、それなら貴女のお伴を致しませう』

『是非お願ひ致します、一刻も早く』

『承知しました、手の廻らん中今から直ぐでも參りませう』

と二人が話をきめた時、唐突に入口の扉が開いた

喫驚して二人が見迎へると、其處に大探偵武智が拳銃を手つて突つ立つてゐる

暗中劇

思ひ設けぬ事なので、傳子はきやつと一聲叫ぶと共に其處へ倒れて了つた、親友和田博士の夫人ではあり、流石の武智も一寸氣を取られてゐると、その隙を見て伏見は素早く部屋を遁げ出した

『待て！』

といひさま、倒れた傳子はその儘にして、武智は部屋を出て伏見の後を追つて、二階の階子段を驅け上つた

かういふ惡人の家に限つて、必らず抜け穴などがあるものだ、鏡

の後とか、ストーブの影とか、又は壁側とかにさういふ物はあるまい
かかう思つて武智は熱心に探したけれども、其麼ものは見當らない
『不思議だ、どうも不思議だ！』
と武智は一人呟いて、暫らく其處に立つて考へた
『どうも二階には居らん、矢張外へ遁げたらうか、待てよ、兎に角
一應三階まで探して見やう』
かう思つて、武智は更に三階へ上つて行つた
三階は二階よりも室數は少いけれども、なほ三四の小さな部屋が
ある、武智はこゝまで上りつめて、先づ様子を窺つた、やがて武智

は先づ一つの室へ入つた、よく見るとそれは屋根裏らしい處で、窓
も高く四方主として壁で造られでゐる、武智は注意してあたりを見
廻すと、何か犯罪用の器具らしいものが眼についた、扨こそ！茲に
秘密の物を隠して置くのかと思つて、更に精しく四邊を見廻す時、
突然がんといふ音がした
『やつ！』
と武智が驚いた時には、もう入口の戸は嚴重に閉されて、ガチツと
錠をおろす音がきこえた

武智の危難

『過つた！』

と思はず武智は呟いた、これは勿論伏見のした業である、流石に機敏の武智であるけれども、不知案内の家であるから、注意！注意を加へたのであるが、遂に惡漢の好計に陷つて了つた

『やい武智、態を見ろ！』

と伏見は戸口の前で聲高く罵つた

『汝がいくら機敏を誇つても、この我輩には敵ふまい、どうだ、之でも我輩の對手になれるか

もう此時には武智は冷然とかまへて、少しも伏見の言葉には耳を假さない、そして何の邊を破つてこの部屋を出やうかと考へた、伏見はそれとも知らないで、なほも惡口をつゞけてゐる

『やい頓痴氣、汝はよくも我輩に探偵をつけたな、けれどもその手に乘るやうな俺ではないぞ、先日も前田侯爵夫人の話で我輩を欺さうとしたらう、ちやんちやら可笑しいや、俺はとうから夫人が鶴田へ行つてる事などは知つてゐるのだ、緑會の事にしてもさうだ、我輩が音なしく見て居れば、いよ〳〵下らないおせつかいをする生

意氣な事をしなければ、こんな事にならなくもよかつたのだ、やい武智、汝はそれでも露國一の機敏を以て任じてゐるのか、はゝゝゝ』

併し武智は一言も返答をしなかつた、こんな奴に口答をするのは全然無益だと思つたからである、そして尙も出口を見付けやうとした、けれども窓らしい窓は外側に面して一つあるばかりだから、其處からは這ひ出す事も出來ない、よし又出られるにした處が、三階の高い處から落ちてはどうしやうも無い、でも鐵張とか何とかになつてるのではないから、長い時間をかけたらどうにかならう、併し今はその長い時間が禁物である

武智の答が無いのを見て、伏見は手を拍つて喜んだ

『はゝゝゝ、どう〳〵閉口したね、おい天才君、我輩は天才といふものはかう脆く係締に落るもんぢや無いと思つてゐたよ、え、おいどうだい、何とか返事をしろよ、何とか返事をさ』

併し武智は一言半句の答をしない、伏見の罵る聲のみが空しく三階の廊下に反響する、死んでるのか生きてるのか少しも分らないので、伏見は一寸思ひ惑ふ風だつたが

『よし、それならよし』と獨語をはじめた『武智の樣な奴を生かして置いては世の爲によくない、譬へ外國へ行つてもつけられる恐が

ある、殺してやらうにも一寸手にあまるから、この機會を利用して
いゝ方法をとらう』
斯くいひ捨てゝ、伏見は自分の室へ行つた、彼の室にはいろ〳〵
な毒藥が貯へてある、それをあれか之かと選んでゐたが、到頭その
中から黄色の硫黄末を選み出した

毒烟!! 火光!!

暫らく伏見が去つた樣子に、武智は滿身の力を雙腕にこめて極力
入口の戸を押し破らうとした、けれどもしつかり錠をおろされた戸

は宛然人間の微力を笑ふもの〻如く、かすかにきしんだばかりでび
くともしない、秘密の鍵をさし入れて見ても、別に閂があると見え
て何等の効力が無い
その中に階子を上る足音がして、再び伏見の遣つて來た氣勢がす
るかと思ふと、忽ち咽る樣な臭が鼻をついた、明かに硫黄の煙でゐ
る
『やい武智、早く死ばつてしまへ、譬へ汝が天に翔り地にもぐる術
があつても、かうなればもうどうする事も出來まい』
武智は懐中電燈を照らして見ると、戸口の邊に細管が挿し込まれ

てそこから毒烟が濛々と入つてくる、その烟はだん〳〵部屋に滿ちて、刻一刻に呼吸が苦しくなつてくる

そこで武智は先づ高窓の玻璃を碎いて新らしい空氣を入れ、更に小刀の尖で屋根裏に孔を穿け、其處から新らしい空氣の流入を計つた、そして今度は毒烟の入る細管の口をふさいだ、けれども硫黄の烟はまだ入つてくる

『やい武智、降參か、じたばたせずに往生しろ！』

と外ではなほも伏見がほざいてゐる

默れと武智は初めて怒號した、その威嚴のある聲に伏見は思はず

聲ををさめると、武智はつゞけて

『汝のやうな鼠輩に命をとらるゝ我輩ではない、見ろ、汝の足許に汝の命は落ちてるぞ！』

『はゝゝゝ、引かれ者の小唄とは汝の事だ、愚圖々々せずに死んじまへ！』

と伏見は罵りかへした

流れ入る毒烟は、外よりの新らしい空氣の爲に薄められて、武智の身體に害を及ぼす程ではなかつた、殊に毒烟はだんだん入る事が少くなつて、やがては極めて微かになつて了つた、もう伏見の罵る

聲も起らない、白夜の光はぼんやりと高窓から忍び入つて、部屋の中を一層灰色に暈して見せる

夜はもう一時を過ぎたらうか、風の音もすつかり止んで、北極圏の回轉する音も聽こえるやうに思はれる

『伏見の奴とう〳〵遁げたな』

餘り遠く落ち延びない中に捕へなければならない、けれどもかうしてゐては出る事が出來ない、之まで追ひつめて居つてこの儘閉ぢ込められてゐては、第一武智の名譽にも關する、どうにかして瞬時も早くこの部屋を出なければならない、ピストルを放つてやらうか、併

し餘り高いからその音もきこえまい

『よし、好い事がある』

と武智は不意に叫んだ、そして足許にある藁を取り上げて、それを小さな束に結んだ、武智はこの藁束に火を附けて、ぼうつと赤く燃え上るのを待ち、それを高窓から外へ投げ出した、自分がこゝに在る事を通行の人に知らせる意である

一段落

和田博士は、今日一日の出來事を思ふて呆然たらざるを得なかつ

た、身は大學の教授であり、且つ美術家として一世の尊敬をあつめる紳士であるだけ、未だ曾てかういふ事件に出あつた事はない、尤も大探偵武智を親友としてゐるから、隨分種々な出來事のある事は耳にする、白刃閃めき、鮮血ほとばしる底の犯罪や、恐怖すべき幾多の殺人事件や、さうした刑事上の事件も幾度かきいた、けれども之れは自分自身に關係した問題ではない、何だか幕一重を隔てた彼方の世の出來事の樣な氣がする、然るに今日はその豫期してゐない事が自分の身の上に起つた、夢といはうか、夢にしては餘りに明かな現である

かう思つて、博士は一人或る料理店の卓子によつた

既に讀者諸君の知らるゝ通り、博士は先に武智加藤等と共に、さん〳〵八幡の森から群馬村あたりを彷徨つた、そして滿璃子の行方を尋ねあぐんだ擧句、兎も角もと馬車を得能の病院へ走らせて見ると丁度少し前、滿璃子と共に馬車に乘つて都へ向つたといふ

そこで一同は兎に角一安心した、心配して居つた滿璃子が生きてさへ居れば、その方面は先づ心を勞する事が無くなつた、之からはたゞ犯人の檢擧である、で、三人はそのまゝ都へ引きあげた、そして都へ着くや否や、武智と加藤は直に警視廳に歸つた、彼等の活動

は實に之から後の事である

博士は武智等に別れてから、一人此料理屋に入つたのである、直に家へ歸らうかと思つたけれども、家へ歸つても面白くない、妻の傳子は何となく敵の樣な氣がして、同じ家に住んでゐても少しも心が許せない、自分の處へくる手紙でも何でも、先づひそかに傳子が見るといふ樣な始末である、一擧一動に眼をそゝがれて、外出すれば間諜をつける、まるで敵國に住む樣な氣がする、家庭の樂しさとか、我が家とかいふ樣な氣は少しもしない、だから外出しても兎角家へ歸るのがいやだ、殊に今日は思はない事件に遭遇して心は十分

に興奮してゐる

『兎に角今夜は何處かで夜を更かさう』

かう思つて博士は食べたくもない料理などを註文した

『おい』と博士はナイフの柄でコツ〳〵と卓子の端を叩いて『もう一杯ウヰスキーを吳れんか』

給仕は博士の命令に從つて、更に幾度か琥珀色の芳醇なのを運んだ和田は平生餘り酒を嗜む方ではない、けれども此夜は不思議に飲む氣になつて、飲んで見れば思の外量も進んた

『や、醉つたぞ！』

博士はかう獨語して、醉眼をあげて四邊を見廻した、その邊に誰か知つてる者でもゐないかと思つて、話相手を索めたのである、けれども誰も知つてる者は居なかつた、また知つてる者のあまり行くべき樣な場所ではない、で、博士は電燈の下に紅くなつた顏を暫らく照らさせてゐたが、やがて又ガツカリして手をポケツトの中へ突つ込んだ

倶樂部の夜

『不思議な目にあつた！』

何氣なく博士は呟いた、するとあたりに居た客は、皆なナイフやフォークの手を止めて、怪訝な顏をして博士を眺めた、その樣子に博士も氣がついて、極り惡いやら何やらに、誰にともなく苦笑をして見せた

『武智はどうしたらう、あの男が力を入れゝば、いづれ此事件も一兩日中には解決がつくだらう、けれども不思議だ、どうも素人の我輩には少しも見當がつかない』

博士はかう腹の中で思つた、考へなほして見ても、どうもかういふ出來事が不思議でたまらない、新聞に見、話に聞いた事でも、之

れが自分の上に來て見ると、人間といふものは喫驚するものである

『それが俺の上!?』にといふ自覺が起ると、人は半ば不思議に、半ば驚愕に、好奇の眼を睜るものである

『おい會計だ』

博士は不意に給仕を呼んだ、餘り考へ込んでゐるのを、他の客がまだ不審にしてじろ〳〵見る者がある、それが博士の心にさはつたのであはて丶その料理屋を出た

『さうだ、今夜はもうあの事は心配すまい、一切の事を武智にまかせておけば大丈夫だ、安心して何處かで面白く遊んで行かう』

かう考へ乍ら博士はぶら〳〵綠倶樂部に行つた、倶樂部にはまだ常連の客などが多くゐて、知合の誰彼などもその中に見えた

『や、和田さん、今日は一日見えませんでしたね』

『どうも暫らく、展覽會の御作は素破らしい成功でしたね』

などゝ左右より問ひ寄る者もあつた、博士はそれをよき樣にあしらひつゝ

『おい一寸』と一人の給仕を呼んで廊下へ連れ出し『君、今夜倶樂部へ武智が來なかつたかね?』

給仕は手紙の事でも尋ねらるゝかと思つてびく〳〵してゐたが、

初めて安堵して

『いえ、今夜は見ませんでした』

『さうか、では誰か――いや、加藤は見えなかつたかね？』

『は、加藤さんなら先刻お見えになりましたが、間もなく何方へかお行でになりました』

『さうか』といつたまゝ博士は給仕を殘して、又群集の方へ近づいて行つた

群集の一部には今骨牌戲が開かれた處である、頻に騒り騒ぐ中に交つて、札をきる音がバチ〳〵と響いた

『和田さん、どうぢや一戰加入らんか』

鷲鼻のでぶ〳〵と肥つた一紳士はかうすゝめた

『左樣、僕も仲間に入れて貰はうか』

と博士は紳士達の中へ割込んで、その中の一つの椅子に腰をおろした

合圖の火

骨牌をしたり、玉突を遣つたり、さんざん時間をつぶして、和田が倶樂部を出たのはその夜もいたく更けてからのことであるが、博

士はまだ家へ歸る氣になれなかつた

『さうだ、あの先生の處へ行つて見やう先生呑氣だからまだ起きてゐるだらう』

かう思つて、博士はその志ざす街へ足を向けた

夜はもういたく更けてゐた、辻待の馬車ももう殆ど無くなつた、軒先につけ殘された電燈はしよんぼりと輝いて、遠くのアークライトの光が暗い夜を一層暗くする、その中に忍び來つた白夜が、一層あたりの光景を凄慘たるものに見せる、仰げば星も見えないで、北國の都の重くるしい建築が、胸を壓するばかりに被ひかぶさつてゐ

る

そして間もなく友人の家へ着くといふとき、博士は不意の出來事に驚かされた、見よ！博士の立てる眼前咫尺の處へ、炎炎たる一團の火の玉が落ちて來たではないか

『や！』

と思はず叫んで博士は立留つた、火の玉は落ちて散亂して直ちに消えてしまつたが、更に第二の火の玉が又落ちて來た、今度のは博士もよく見届ける事が出來た、それは通りかゝつた家の三階の窓より投げ出されたものである

『何だ、一體何の事だ!?』

と先づ喫驚したが、その瞬間に種々の疑問が群がりわいた、今頃、三階の窓から火を落すといふ事はこれは容易ならん事である、それかといつて他に火焔のもれない處を見ると、過失の出火といふ樣な事でもないらしい

『さうだ、こりあ何かのしらせだ、救助か何かを求むる手段だらう

『よし兎に角中へ入つて見やう』

かう思ふと同時に、博士は行きなり表へ廻つた、そして表の入口の扉を力にまかせて押した、扉はその力を待たずに容易く開いた、

けれども中は闇黑で、少しも人のゐる樣な氣配はしない

深夜の邂逅

和田博士は此樣子に一寸ためらつた、がやがて燐寸を出してすつた見た、そして三階を志ざして上つた

二階にも何等人の影は見えない、その邊の扉などが放け明してあつて、何となく樣子が變つてゐる

『餘程可笑しい！』

かう思つて博士は三階まで上つた、すると急に硫黄の臭氣が鼻を

衝いた、思はず博士はくしやみをすると、人の來た樣子に氣のついた武智は

『誰だ！』

と部屋の中から聲をかけた

『お！』

と博士は喫驚した、確かにきゝ覺えのある聲である

『誰だ？』

『いや、武智ぢやないか』

餘り意外なので博士はこれ以上にはいへなかつた、內でも博士の

聲に氣がついたらしく

『何だ、君は和田君か』

『さうだ、君はどうしたんだ』

『いや、こゝへ君が來やうとは思はなかつた』

『僕も意外だ、まさかかういふ處で……』

『まア兎に角此戸を開けてくれ、實は惡者の爲にこゝへ閉ぢ込められたのだ』

『さうか、直ぐあけやう』

博士はハンドルに手をかけて見たが、深く二重の錠がおろしてあ

るので開きやうはなかつた

『鍵がかゝつてるな』

『うむ、二重にかゝつてるから破るより外仕方がない』

そこで二人は内外相協力して、此戸を破りにかゝつた、普通の部屋の戸と違つて、おそろしく岩疊に出來てゐるので、容易にこはす事が出來なかつたが、漸く二人はその一部分を破壞する事が出來た武智は忽ちその穴から姿をあらはした、眼色は稍々蒼褪めて、何處となしに緊張してゐる

『どうした？』

『いや、惡漢を茲まで追ひ込んでね、却つて計略に陷つた』

博士は今更の樣に驚いて、好奇の眼を輝かした

『どんな種類の犯罪だね』

『どんな種類つて、今日の事件に關係してさ』

『え、僕等の身の上に就て？さうか、して惡漢はどうしたらう』

『今まで茲にゐたのだが、もう遁げて了つたらう』

『今まで？』

『さうだ、僕を此室に閉ぢこめて硫黄攻にしたのだ』と武智はいつたが『あ、さうだ、殊によると傳子が下に氣絶してゐるかも知れな

い』

『傳子！我輩の妻が？』

『さうだ、まア行つて見やう、話は後でする』

かういつて武智は急いで階下へ飛び下りた、博士もその後についてて行つた、けれども伏見の部屋にはもう人影もなかつた

『畜生！風を食つたな、よし何處までも追つてやらう』

武智は忽ち身を飜へして戸外へ出た、博士はたゞ煙にまかれて、これも武智について外へかけ出した

夜半の電話

和田家の運轉手に化けた加藤は、その夜おそくまで博士邸に待つてゐた、傳子は出てゐるし、博士は歸らないので、無聊の時間を送り無聊の時間を迎へてゐたが、それでも加藤は少しも失望しなかつた、滑稽家ではあるが正直な運轉手の言葉もあるので、やがて何物かを掴み得る自信を持つてゐた

その夜も最早更けまさつて、草木の眠る時も近づいて來た、流石に夜の交際を樂しむ國だけあつて、某の倶樂部、某の夜會へ行けば

華やかなる電燈の下にヘリオトローブ、ヴアイオレットの香は亂れて細形の靴に蹴開らく裳裾の花は紅紫とり〳〵に亂れ散らうが、街は漸く夢深からんとする頃である、突然電話室のベルがけたまゝしく鳴つた

『よし來た』

と加藤は思はず呟いたが、とつかはと身を起してそのまゝ電話室へ駈けて行つた

『モシ〳〵、はい、左樣で御座います、え？あア奥樣で御座いますかはい、承知いたしました、境橋の側へ、境橋の側へ持つて行くんで御座いますな、承知いたしました、至急？　はい、油を……油を澤山準備するので御座いますか、はアはア、では左樣なら』

チリン〳〵と電話を切つて、室を出て來た加藤の顏には隱す事の出來ない微笑が浮んでゐる

『大分狼狽てゝゐる』

かう加藤は獨語ちたが、直に出かける準備に取かゝつた、服裝は既に取りかへてあるのだから、少し窮屈ではあるが我慢して、帽子の被り方などを本物の運轉手に似せるべく注意した、それから一應自働車を精密に調べて、やがてその運轉手臺に上つた

太い護謨輪は夜の小砂利を嚙んで靜かに街路に出ると、今度は疾風の樣に走り出した、冷たい夜風は車上の人の顏を吹いて、陰濕な重たい空氣は鉛の樣に皮膚に迫つてくる

『今夜は何か手づるを摑んでやらう』加藤は車上に於て窃かに思つた『いつも先生にばかり先鞭をつけらるゝから、せめて一度は此方が先に功名をあらはしてやりたい、先刻の言葉もあるし、今夜の樣な好機會は又と再びあるまい、さうだ、先生より先に、先生より先に……』

心には功名を描いてゐるが、手は決しておろそかにならない、き

つとハンドルを握つて、闇の中を驀然に馳つて行く

路傍のアークライトは幾度かその車影を鼠の如く地上に投げ、街衢の並木は暈眩しく自働車を送り迎へて、夜の巷に震へてゐる樣に見えた、見すぼらしい運轉手帽に運轉手服をつけてはゐるが、それでも車上の加藤は英姿颯爽たるの風があつた

車上の密語

『おゝ、よく來てお呉れだねえ』

自働車の停まるのを待ち兼て、境橋の側に立つてゐた傳子はいつ

た

『はい、急いで參りましたが少しおくれまして』

加藤はかう答へたが、直に傳子の側に立つてる男に氣がついた、男は外套に包まつてゐてよくは分らないが、和田博士でない事は明かである、あらず、伏見義政である事は流石に烱眼なる加藤の忽ち見て取つた、けれども加藤は十分運轉手になりまして

『あの、お邸へ歸るので御座いますか』

『いゝえさうぢやないよ、一寸用があつてね——貴方何とかいひましたね』

いふ中も傳子は物に怖へた樣にがた〳〵と震へてゐる、男は傳子の言葉をひき取つて

『茅場村だ、おい運轉手、朝七時までに茅場村まで行つてくれ』

その聲は確かに伏見の聲である、加藤は何となく焦立つ胸をおし鎭めて

『茅場村で御座いますつて？』

とわざと喫驚した樣な聲を出す、茅場村は都から數十里離れた僻村である、傳子は運轉手の樣子に氣の毒さうな顏をして

『少し遠いので濟まないがね、どうしても今夜中に行かなきやなら

ん用事が出來たのだからね、どうか今いつた時間までに彼方へ着くやうに行つておくれ、今度だけだからね、そしたら、又舞踏會へでも何でも出してやるよ』

『は、いゝえそれはもう結構で御座いますが』と加藤は何處までも運轉手になりすまして『よろしう御座いますとも、兎に角一生懸命でやつて見ませう』

『どうぞね、そして出來るだけ全速力を出してやつてお呉れ』

『はい、承知いたしました』

加藤は恭しく命を奉じて、ハンドルを捻ると共に、疾風の如く郊

外をさして馳け出した

全く自分の家の運轉手と信じきつた傳子は、初めて安心したらしく伏見に向つて話し出した

『ねゝ伏見さん、私あの時は全くびつくりしましたよ』

『はゝゝゝ』と伏見は笑にまぎらして、手つきで傳子の聲高きを制した

『大丈夫ですよ、彼は少し間抜ですから』

と小聲でいつて、『今頃は何はどうして居りませう』

『武智ですか』と伏見もつい釣り込まれて『多分あの部屋で死つた

らうと思ふんですがね、充分硫黄責にして置たから、でも彼奴の事だから援からんとも限らない、充分我々は警戒する必要があります

よ』

『私は怖ろしい』

と傳子は今更犯罪の恐怖に戰慄してゐるらしい、加藤は二人の談話を注意してきいてゐた、車輪の音にとぎれ〳〵ではあつたが、それでも事件の内容はほ〻推察し得た

二人は尙も何事か喋つてゐたが、餘程安心したものと見え、程なく二人は自働車に乘つたまゝ眠つて了つた

加藤の計策

事多かりし夜を後にして、朝は再び彼等の上に來た、加藤は勿論終夜自働車を馳らせてゐた、けれどもそれは茅場村に向つて馳らしたのではない、たゞ街のまわり、郊外の道はゞをぐる〳〵廻つて居たのである

やがて二人は眠りから醒めたが、互に顔を見合せて

『おや、眠つて了ひましたね』

『矢張心身ともに勞れてゐたんですな』

といつて苦笑した、然し二人は郊外の野の景色に十分安心して、少しも運轉手に就ては疑を挿まない

『おい、茅場村まではまだ餘程里程があるか』

暫くしてから斯う伏見が尋ねた

『はい、いゝえもう直で御座います』

『本當に御苦勞だつたねえ』と今度は傳子が聲をかけた『いづれお禮はどつさりするからね』

『どう致しまして』

といつて、加藤は相不變どん〳〵自働車を走らせた、二人は少しも

その邊の地理を知らないので、昨夜通つた處を今又通つてゐやうなどゝは少しも氣が付かない、一歩々々茅場村に近づくと思つて、龍の頤を逃れ得た樣に心中では喜んでゐる

『やッ終つた！』

と突然加藤が叫んだ、伏見も傳子も驚ろいて

『どうした〳〵？』

と立ちかける

『いえさう大した事ではありませんが、今一足といふ處で油が盡きてしまひました、尤も用意して來てゐますから注しさへすれば、い

ゝのですが、その間に一寸時間がかゝります、如何です、油をさす間に朝飯でも召食つては』

『さうか、よろしい』と伏見は車から下りて、『傳子さん、どうせもう先が近いのだから何も急ぐ事はない、運轉手のいふ通り一寸朝飯でもやつときませう――おい、では我々は一寸やつてくるから、その間に準備をしといてくれ』

かういつて二人は最寄の料理屋へ入つて行つた、その後姿を見送つて、加藤はひらりと車から飛び下りると、すぐ様近所の郵便局へ駈けつけた、

最後の幕開く

武智は和田博士に援けられて、此時既に郊外のある隱家へ來てゐた、之は先に警視廳を出る時、加藤とも深く謀し合はせておいたからである、そこへ加藤の電報がついた

『よし、成功々々』

電文を一讀すると、武智は手をうつて驚喜した、その樣子を見て和田博士も

『何だ何だ？』

とのぞき込んだ、博士は茲まで一所に來てゐたのである

『いや犯人が目前にゐるのだ、さあ行かう〜』

いふかと思ふと武智は立上つて、最寄の警察へ電話かけた

『何だ？』

『いや應援巡査を賴んだのだ、一人や二人の犯人は何でもないが、それでも萬一取遁しては不可からね』

やがて二人の應援巡査が見えたので、武智は之れを從へて飛ぶが如くに料理屋をさして出かけた

□　□　□　□　□　□

伏見と傳子は簡單に朝飯をすましして、今や料理屋の門を出ようとすると

『待て！』

と突然霹靂の如き聲が起つて、驚いて顔をあげると、其處に大探偵武智を初めとして、運轉手と思つた加藤、和田博士、それから二人の巡査まで立つてゐる

『はッ』

と思つたが、流石に伏見も惡漢である、右の手がポッケットへかゝつたと思ふ瞬間、ドンと凄じい音がして拳銃が鳴つた、けれども武

智の機敏は更に之れ以上である、伏見が第二彈を發射しやうとした時には、もうピストルは手から打ち落されてゐた、そして二三の格闘のあつた後難なく之を取りおさへた

『おい繩をかけろ』

巡査は心得て忽ち高手小手に縛りあげて了つた、傳子も勿論連累者として繩をかけられた

伏見は實に眞晝の夢を見る心地である、終夜自働車を走らせたのだから、もう數十哩もある茅場村へ近づいたと思つてゐたに、そこへ突然武智等が出たのだから殆ど人間業とは思はれない、その時加

藤が進み出で、

『おい伏見、昨夜の運轉手をまさか僕だとは思はなかつたらう、實はもう前から手筈をきめて待つてゐたのだ、一晩中自働車を走らしたのも、皆な一つ處を廻つてゐたのだ、こゝは警視廳から何哩も離れてはゐないぞ』

伏見は餘りの不思議さに、齒がみをなして口惜しがるのみで何もいふ事が出來なかつた、その時武智は嚴然として

『おい伏見、貴樣が西班牙の一理髮師である事は波麻子によつて分つてゐる、それから今度行つた犯罪もすつかり調べがついてゐるの

だ、もうぐず〳〵せずに服罪しろ、傳子とても同じ事、これから中央監獄へ向へて護送する』

伏見の顔は見る〳〵蒼白になつて、一言も口をきく事が出來ない然し之よりも一層凄慘な光景は、和田博士と夫人傳子とが顔を見交した時の二人の表情である

露都の沸騰

總ての事件は去つた、限りなき妖雲に被はれ、波瀾頽濤、窮りなかつた佳人滿璃子の身邊も、惡漢伏見の捕縛と共に、今は殆ど光風

霽月の姿となつた

翌日の露都の各新聞は、爭ふて此奇怪なる出來事を報道した、久しく事なかりし新聞界は、此事件の爲に急に色めき出した、殊にその關係者が上流社會に多いので、非常な興味と多大の好奇心とを以て一般に迎へられ、敏腕なる記者は腕によりをかけて、各々その眞相を得た事を誇りとした、けれどもその中には、隨分揑造誤傳に類したものも多かつた、今その多くの記事の中から比較的正確なるものをとつてその一節を摘錄すると次の如くである

――日輪西天より出づるの日あらば奈何、河水逆に流るゝの時あ

らば奈何、それよりも更に驚かるゝ事こそ帝都の中央に於て起りしぞ奇怪なる、事の由來を尋ぬるに、乘馬令孃、自轉車令孃の名を以て知られたる池邊卿の遺愛滿璃子なるものあり、昨日繪畫購求の相談の爲に博士和田義太郎に會んとして、自轉車を郊外に馳らせたるに、中途突然惡漢の爲に襲擊せられたり、然るに之には深き仔細ありて元來和田博士夫人傳子なるものは、非常に嫉妬深く、平生夫の行動に監視をつけ居る有樣なるが、此日も博士と滿璃子との會見を探知し、早くも之を姦通と認めて、秘かに伏見侯爵に依頼して滿璃子を途中に慘殺せんと企てたり、伏見侯爵とは

何者ぞ、彼は西班牙の貴族なりと稱して、長く社交場裡に出入したりしが、實は理髮を本業とせる惡漢にして、己れが滿璃子の容色と財產とに懸想せるを機會とし、その望の達しがたきを知りて傳子より莫大の金品を貪り、遂にその乞ふがまゝに滿璃子慘殺の件を承諾したるなり、之より先伏見は波蘭の一女子を欺きて之と結婚し無情にも振り捨てゝ顧みざりし事ありその他かゝる犯罪は擧て數ふべからず、併も彼の犯罪をなすや、その手段如何にも巧妙にして、常に侯爵の名の下にその罪跡をくらますを常としたりき、今回の事變の如き、名探偵武智氏のあるにあらずんば容易に

かくの如き解決を見るに至らざりしならん、今や犯人の捕縛せらるゝありて、事件一旦段落を告げしと雖も、その裏面には失戀の美術家あり、戀を得たる運轉手あり、薄命なる俠婦あり、而して之に配するに加藤武智兩探偵の苦心あり、事件紛糾してその底止する處を知らず、わが社は機敏なる數名の記者を督して、各方面に材良を蒐めつゝあれば、明日より此興味ある事實譚を掲載し、以て空前なる怪事件の内容を讀者諸君の眼前に展開せしめんと欲す

それから新聞に連載された事件の内容といふのは、實に本篇に記

し來つた物語である

都へ都へ

この事件が滿都の新聞紙に喧傳せらるゝ前、即ち伏見が捕縛せらるゝと間もなくである、滿璃子等は郊外の避寒地に於て武智よりの電報を受取つた

『おや、もう事件が濟んだのか知らん』

と滿璃子は不審相な顔をしていつた

『さうかも知れない、一寸拜見』と本野は電報を取つて見て『成程

發信人は武智で、『ブジスンダスグカヘレ』か、さうすると惡漢共もやられたんだな』

本野はもう全然貴公子の態度である、打僕傷ももう殆ど全快して健康な美くしい顔に復つてゐる

滿璃子は莞爾にほゝ笑んで

『兎に角嬉しいわ、私初めて清々しました、――御覽なさい、あら、あんなに木の葉の上に日光が流れてゐる』

滿璃子の指差す方を見れば、空は蒼々と澄み渡つて、大野の上には洪水の樣に日光が降り注いでゐる、地平線を劃る雜木林の一點が

風を受けた拍子に、折々キラキラと輝く、遠くの空は日の光に霞んでその中には光の子が踊つてゐるやうに見える

本野は滿璃子のいふがまゝに外を眺めやつたが

『成程、今日は空まで我々の心の樣に晴れ渡つた』といつて笑ひ

『兎に角武智があアいふのだから、もう絶對に危險がないのでせう

一應歸つて樣子を見やうではありませんか』

『さうですね、では之からすぐ出かけませう』

そこでベルを押して宿屋の書記を呼び、勘定書を持つてこいと命じた

『へい、もうお出かけで御座いますか、どうも御粗末ばかり致しまして』

と番頭はお世辭をふりまいて、やがて書付を持つて來た、そこで二人は會計をすまして、やがて此田舍の宿屋を出た

『どうぞ又お二人樣でお出で下さいまするやう、奥樣には殊にお氣をつけてお行でなさいまし』

と番頭は送り出しながらいつた『奥樣には』といふ言葉に、滿璃子はさつと顔を赧くしたが、すぐ素知らぬ風をして自働車に乘つた、そして心の中では、矢張私達は夫婦に見えるのか知らん、二人で一

緒に來たのだから無理もないが、奥樣といはれて見ると恥かしい、私はこんな臆病者ではなかつたけれど、と微笑の頰を隱しながら思つた

本野は其麼ことには少しも氣がつかぬ樣な顔をして、悠然と自働車に上つた、そして熟練した手つきでハンドルをまはすと、忽ち庭前に弧を描いて、自働車は疾風の如く馳り出した

滿璃子は無言のまゝ座つてゐたが、その伯爵ぶりを頼母しいと見た

結婚式

その翌々日盛大な結婚式がセントラル教會に於て擧行された、それはいふまでもなく池邊滿璃子と本野伯爵との結婚である

初め滿璃子は、和田博士との戀を失ふてより、世の中から變り者を以て目されて來た、滿璃子もまだそのつもりになつて、紅裝粉黛の社交界には出入しないが、あらん限りのお轉婆を盡して來た、そしてそれが爲に起る非難などは物の數ともしなかつた、母親に叱られやうが親戚の者に爪彈きされやうが、其麼事は眼中に置かないで

仕度い三昧を振舞つて來た

『池邊のお轉婆娘』

といへば知らぬ者はなかつた、殊に容貌の秀麗なると、失戀したらしいといふ噂とは、愈々世人の好奇心を刺戟して評判を高くした

それが新らしい運轉手得能好之助を得てから急に樣子が變つて來たそして彼の八幡の森事件に遭遇してから、益々その態度が變つて來た恐ろしき死生の間に出入して、身を投げ出した男の働きぶりは知何に滿璃子の感情を刺戟したらう、しかもその傷ついて病院に横はるを見ては壯烈を感じた女の心は、次第々々に戀の淵に陷つたの

である、しかもなほ運轉手ではと思つてゐたに、得能好之助とは假の名で、實際は本野伯爵だといふのではないか

既に命の親である上に、滿璃子の心がかうなつてゐるのだから、話は意外に早く進んだ、地方の領地へ出張中の母親も、電報を受けて歸つて來たが、滿璃子等の結婚を却て喜んだ、一人で置いては兎角非難の多い娘が、自ら進んで結婚するといふ事は、池邊家のため、滿璃子自身の爲に甚だよい事である、それならば此機を利用して、すぐ式を擧げたらいゝだらうといふ事になつた

親戚故舊名門の數を盡して一堂に會した、その中には勿論武智も

加藤も招かれてゐた、覓裳たなびくが如き花帽の數々、雪かと見まがふ燕尾服の胸と入り亂れて、今や會堂には劉朗たる音樂が起つた

白髯の牧師は金の十字架を胸にかけ、しづしづと祭壇に歩み寄つて、嚴かに新郎と新婦との手を握り合はしめた

『上帝の御名により、玆に本野伯爵と池邊滿璃子との結婚の式を擧ぐ信義、恭謙、誠實の心を以て、今より後二人は永久に結び合されし、心を一つにして人の世の爲に盡さん事を主イエスの御前に告ぐ』

終つて又喜ばしき奏樂が起つた、觀聲堂に滿ち、二人を取圍んで敘

る祝辭に、新郎新婦はその應接に暇がなかつた

『お目出度う』

群集の後から武智はにこ〳〵して顔を出した

『や、武智さん』と本野は急いでそちらへ近づいて『おかげ樣でと

う〳〵こんな事になりましたよ』

『いや、なにより結構、目的貫徹といふのさ』

『は、、、、さういはれると恐縮しますね』

と本野は嬉しさうに笑をたゝへた、群集は次第々々に會堂を出て、

兼て用意の立食場へと近づいて行く

淋しき柩

同じ日の夕方、同じ教會の門からさゝやかなる葬列が出た、棺は黑布に被はれて四人の使丁が之を舁いてゐる、之は先に滿璃子の身がはりになつて、深夜池邊邸に於て傳子の爲に刺された波麻子の遺骸である、惡漢伏見に欺かれて、一度その妻となつてよりは、健氣にも身を殺してせめて夫の罪亡ぼしをしやうと思つたのである

棺の後には、本野滿璃子の新郎新婦を初めとして、武智刑事課長及び加藤探偵、和田博士及び池邊邸の召使數人がついて行く

此日、和田博士の心中はどんなであらう、滿璃子との戀はいふて歸らぬ昔であるが、現に妻は惡漢伏見と結托して、滿璃子を八幡の森に殺さんとし事の成らざるや自ら池邊邸を襲ふて波麻子を殺したその波麻子は伏見の前妻ではないか、因果應報の奇なるを思へば、運命の不思議を感ぜずにはゐられない

今は妻も檢擧され、その妻に殺された波麻子の遺骸を、博士は特に深い心を以て送るのである

『おい和田博士、人間の運命も隨分數奇を極めるものだねえ』

武智は突然博士に向つて話しかけた

『うむ、僕も今それを思つてゐた處だ』

『さうだらう、朝に華胥の曲を奏して、夕に弔鐘をつかなければならない、實に悲しむべき人生ぢやないか、けれども探偵などになるものぢやないね、親友の妻君でも、今度のやうに捕縛せんけりやならん事もある、僕は實に今日の君の心情を察して何ともいふ事が出來んよ』

『うむ』

和田博士はたゞ呻るのみである

『それにしても此波麻子さんには僕は全く感服した』

『うむ』

本野と滿璃子とは、いふ事の出來ない感情を以て、この二人の巨人の言葉を意味深くきいた

□　□　□

風は多暮の曲を悲しく奏して、夕陽は葬列を寂しく照らした、やがて一行は停車場について、波麻子の棺は波蘭のワルソー行の列車に舁ぎ込まれた、博士は一同にかはつて、之を波麻子の故郷まで送らうといふのである

『左様なら、お大切に』

いふ間もなく一聲の號笛は響いて汽車はゆるやかに動き初めた、

新郎新婦の顔には喜びと悲みの名づけ難き二の色が動いた

運命の女（おはり）

大正五年七月廿五日印刷
大正五年八月　三　日發行

運命の女

定價金四十錢

著作者　宮田暢
發行者　東京市小石川區新諏訪町二番地　岩崎勘兵衛
印刷者　東京市小石川區新諏訪町二番地　サンデー社第一印刷所　電話番町二四九二番　右代表者　矢部政吉

發賣元　東京市小石川區新諏訪町二番地　サンデー社

▼圍碁界第一の書▲

井上孝平共編
サンデー社

□特價金八十錢□
□定價金壹圓□
□送料金六錢□

新刊

圍碁觀戰録

本書は碁界の俊豪本因坊四段井上孝平氏が新様式の下に現代斯壇精鋭の粹たる宮坂三段、瀬越四段、喜多四段、野澤五段、鈴木五段、岩佐六段、中川七段の白熱的對戰に精細なる批評解説を試み且つ各戰士の策戰及び感想を叙説した る者在來の碁譜と其撰を異にす

發賣元

サンデー社

振替東京二二九〇〇番